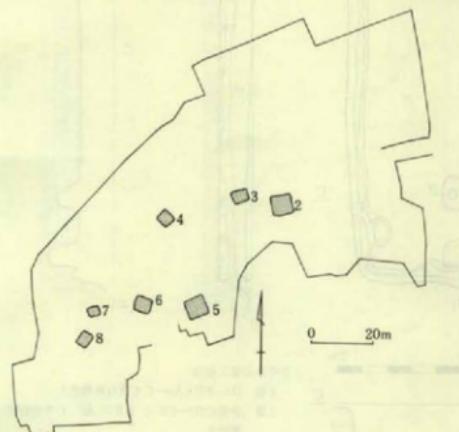


第3節 古墳時代前期の遺構と遺物

1. 概要 (第264図)

上ノ山遺跡に於ける当該期の竪穴住居址は7軒を調査した。漏1号墳を中心として東西90m、南北40mの幅で標高138~141m付近に位置し、調査区の中央から南東方向に分布する。当該期の住居の切り合ひは無く、5号住居址が漏1号墳、8号住居址は、6号墳の周堀とその一部が重複し、周堀の開削によつて形状の一部を破壊していることから、住居址は古墳より前の所産であることを示しており、覆土中に共通して As-C が認められることから古墳造営前の集落として捉えられる。



古墳造営以後の開削、そして調査区外の南方が削平されている状況の為に明確を欠く。現状で集落構成を分類すると比較的規模の大きい正方形を呈する2・5号住居址とやや小型であるが2・5号住居址と同様対角線上に柱穴をもつ3号住居址の1群と長方形で柱穴をもたないグループとなる。

第264図 古墳時代前期の住居址分布図

2. 住居址

2号住居址 (第265図)

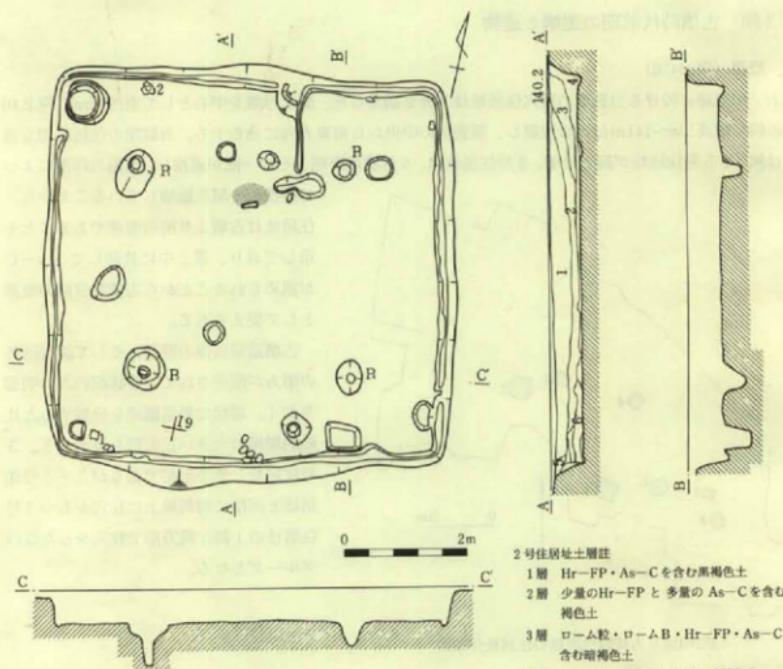
調査区中央やや東の平坦部 I 9 G に検出され、当該期で最も東に位置する。規模は東西6.6m×南北6.4mを測り、方形を呈する。掘り込みは50cmを測る。床面は平坦で堅く締まる。炉址は主柱穴P₁～P₂間に炉縁石を伴い60×40cmの楕円形に焼土が分布する地床炉である。主柱穴P₁～P₄は3.3～3.4mの柱間を測る。貯蔵穴と考えられる掘り込みは、北西隅と南辺東の2カ所に位置する。北西隅は70cmの円形で55cmの深さ、南辺東は60×30cmの方形で50cmの深さを測る。周溝は北西隅を除き全周し、北辺中央やや東寄り1.3mほど仕切り状溝が南進している。遺物は壁面に散在し、南西隅に甕・北西に台付甕の口縁部が出土。南辺中央部に6個の薦籠石が検出された。

覆土はその大半が As-C、Hr-FP を含む黒褐色土で、床面をロームブロックを含む暗褐色土が覆う。

2号住居址出土遺物 (第266図)

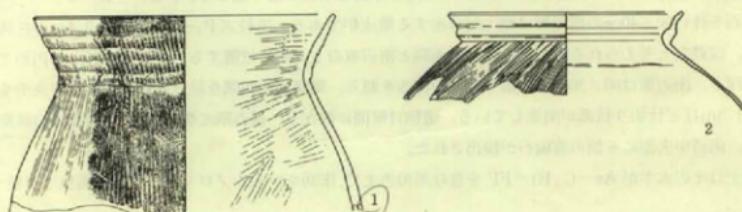
1. 南西隅の出土。胴部上半から緩やかに外反していく字にひらく口縁部が残存する甕で口径17cmを測る。口縁部は5段の輪積み痕を残し、胴部と同様に削板状工具?により器面調整を施している。内面は丁寧なヘラミガキがなされている。

2. 北西部の壁際の出土。S字状口縁台付甕の口縁部で口径14cmを測る。



第265図 2号住居址

2号住居址土層註
 1層 Hr—FP・As—C を含む黒褐色土
 2層 少量のHr—FP と 多量の As—C を含む黒褐色土
 3層 ローム粒・ロームB・Hr—FP・As—C を含む暗褐色土
 4層 ロームBを斑点状に含む暗褐色土
 5層 ローム粒を少量含む暗褐色土
 6層 ローム粒・ロームB・黒褐色土を含む暗褐色土

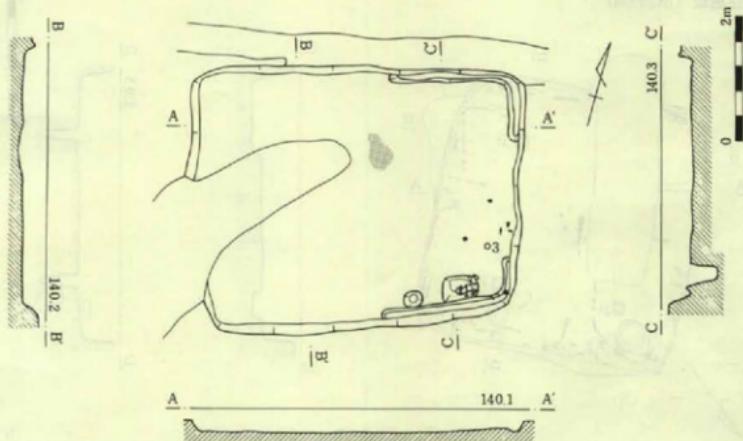


第266図 2号住居址出土遺物

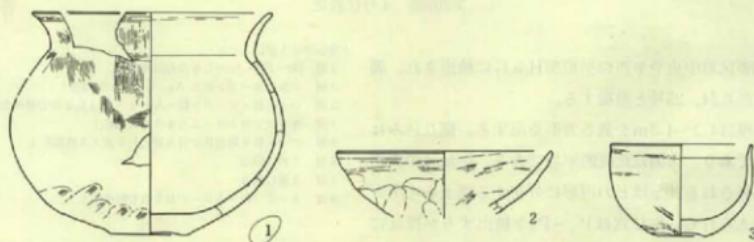
3号住居址（第267図）

ほぼ調査区の中央平坦部 I 7 G に検出され、北辺で 2M、中央部を東西に 3M が走行する。規模は東西 5.3m × 南北 4~4.1m を測る方形を呈する。掘り込みは 20~30cm 強と浅い。床面はやや軟弱で中央部にかけて緩やかに低くなる。炉址は 60×40cm の洋梨形に焼土が分布する地床炉である。主柱穴は確認できぬが南辺中央部やや東に柱穴状掘り込みを 1カ所確認できた。貯蔵穴は南東部に位置し、55×40cm の方形で 45cm ほどの深さを測る。周溝は北東部と南東部に巡る。

遺物は南東部の貯蔵穴周辺に出土し、東壁際に炭化材が少量分布する。



第267図 3号住居址



第268図 3号住居址出土遺物

3号住居址出土遺物（第268図）

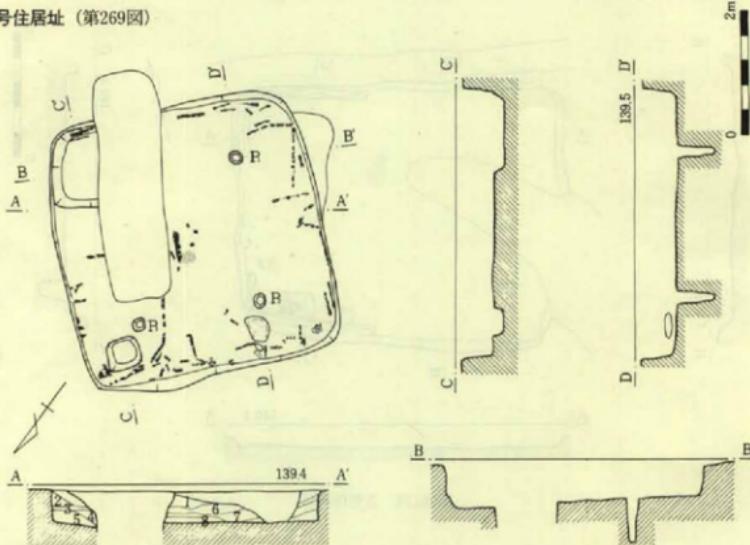
1. 貯蔵穴上面の出土。底径 4.5cm、器高 13.3cm、口径 14.2cm を測る甕。やや偏平を呈する球形胴部よ

り口縁部は緩やかに立ち上がり、口唇部が外傾する。胸部中央に最大径を持つ。口縁部・胸部上半ナデ。胸部下半ヘラキリ。

2. 覆土中の出土。口径12.8cmを測る壺で底部を欠く。口縁部は横ナデ、胸部ヘラケズリ。内面は軽いナデ。

3. 南東部の出土。底径2.9cm、器高5.5cm、口径8.4cmを測る壺。上げ底の底部より直立気味に立ち上がる胸部となり、弱い頸れを呈し直立する口縁部となり口唇部を尖り気味に調整。

4号住居址（第269図）



第269図 4号住居址

調査区の中央やや西の平坦部H 5 Gに検出され、網文住居址24、25号と重複する。

規模は4.2~4.3mを測る方形を呈する。掘り込みは50cmであり、床面は比較的平坦である。炉址は中央部に認められる20cmほどの円形に分布する焼土の地床炉と考えられる。主柱穴はP₁~P₃を検出するが攪乱によつて1本が明確でない。P₁~P₂間が2.3m、P₂~P₃間が2mを測る。貯藏穴は北東隅に位置し、1辺50cmの方形で深さ15cmである。東方隅には攪乱によって明確を欠くが方形と思われる掘り込みが存在する。周溝は確認できない。

遺物は西方隅に脚部片が出土したのみである。P₂の北に作業台にても使用したのか偏平な河原石が存在した。炭化材は壁際に集中して残存する。

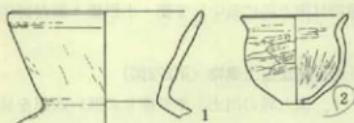
4号住居址土層註

- 1層 Hr-FP・As-Cを含む黒褐色土
- 2層 少量のカーボン粒とAs-Cを含む黒褐色土
- 3層 ロームB・カーボン粒・As-C・焼土粒を含む黒褐色土
- 4層 カーボン粒・ロームBを含む黄褐色土
- 5層 ロームBを斑点状に含み炭化材を混える黄褐色土
- 6層 1層に似る
- 7層 3層に似る
- 8層 カーボン粒・小ロームBを含む暗褐色土

4号住居址出土遺物（第270図1、2）

1は、壺形土器の口縁部片で、胴部は球形を呈すると考えられる。口径11.5cmを測る。

2は、壺形のミニチュア土器の器形を呈する。器面の調整は丁寧である。口径6.4cm、器高5.3cm、底径1.8cmを測る。

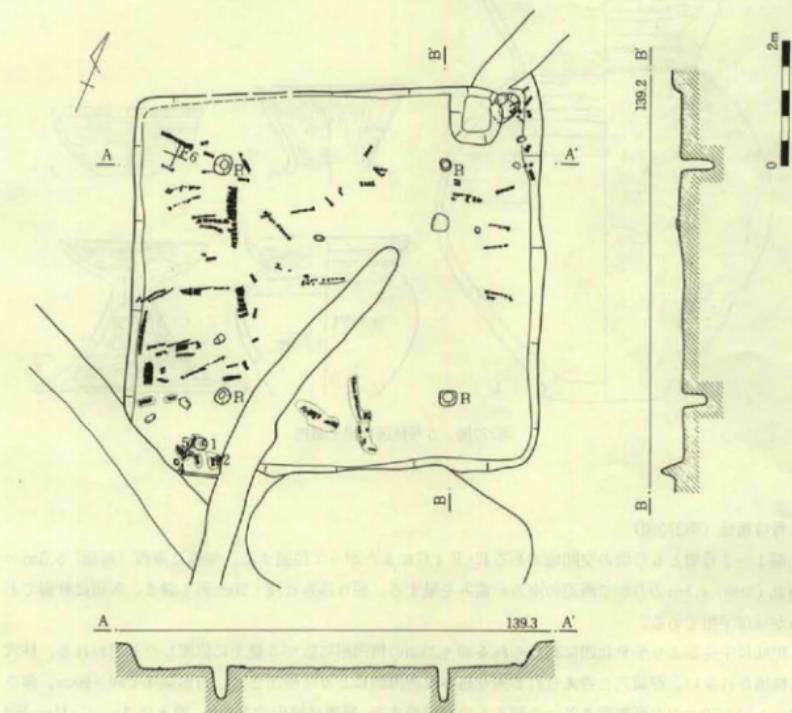


第270図 4号住居址出土遺物

5号住居址（第271図）

漏1号墳と漏2号墳の周堀に接してE 6、F 6 G間に検出され、中央を南北に1Mが走行し、南辺で55号住居と重複する。規模は東西6.2m×南北6.3mのほぼ正方形を呈する。掘り込みは最深部で40cmを測る。床面はほぼ平坦で堅く締まる。炉址は検出されなかった。

主柱穴P₁～P₄は東西3.6m、南北3.7mの柱間で深さ40～50cmを測る。貯藏穴の掘り込みは北方隅に位置し、80cm前後の方形で深さ20cmを測る。周溝は検出できなかった。

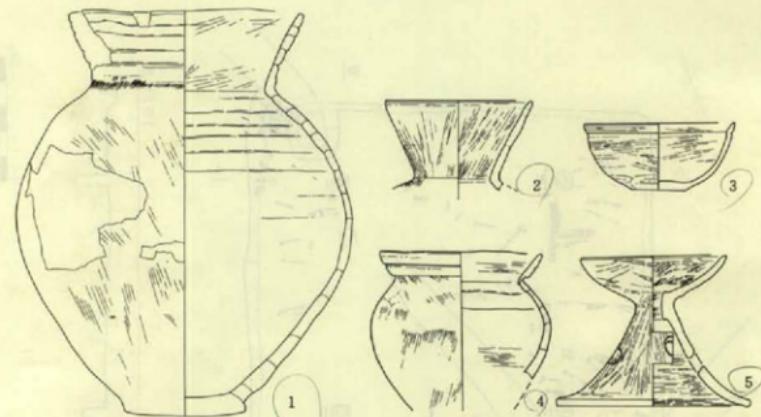


第271図 5号住居址

遺物は南方隅に集中して甕・小形甕・器台が出土。炭化材は中央部より壁際方向に多く分布する。

5号住居址出土遺物（第272図）

1. 南方隅の出土。やや座りの悪い底部を呈し、胴部と口縁部の一部が欠損する甕で口径13.6cm、器高24.4cm、底径7.2cmを測り、胴部に最大径を有する。口縁部と内面胴部上半に明瞭に輪積み痕を残す。
2. 南方隅の出土。胴部を欠く壺の口縁部で口径8.8cm。内外面丁寧なミガキ。
3. 覆土中の出土。口縁部の一部を欠く椀。口径9cm、器高4cm、底径3.2cmを測る。胴部下半に軽い窪ヶ入り、内外面丁寧なミガキを施す。
4. 南方隅の出土。底部を欠く小形甕で口径9.7cm。やや肩張りの胴部に最大径を有する。1と同様に口縁部に輪積み痕を残す。
5. 南方隅の出土。口縁部の一部が欠ける器台で口径8.7cm、器高9cm、底径11.5cmを測る。器面全体に丁寧なミガキを施す。円透は5ヵ所に施す。



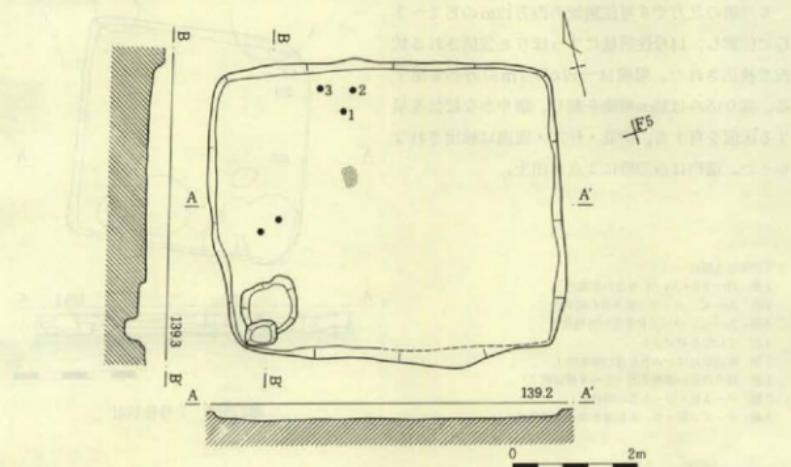
第272図 5号住居址出土遺物

6号住居址（第273図）

漏1～3号墳と6号墳の空間地であるE・F4Gにまたがって位置する。規模は東西（長軸）5.5m×南北（短軸）4.8mの方形で西辺の南方が垂みを呈する。掘り込みは浅く20cm弱を測る。床面は軟弱であるがほぼ平坦である。

炉址は中央部よりやや北西に認められる30×20cmの楕円形に広がる焼土に位置したと思われる。柱穴は検出されない。貯蔵穴と考えられる掘り込みは南西隅に2ヵ所検出され、方形気味で80×90cm、深さ10cmと40×50cmの方形で深さ25cmを測るもののが重複する。周溝は検出できない。覆土はAs-C-Hr-FPを含む黒褐色土が覆う。

遺物は北辺やや西寄りに器台が3点集中し、西辺の中央部付近で甕片が出土。



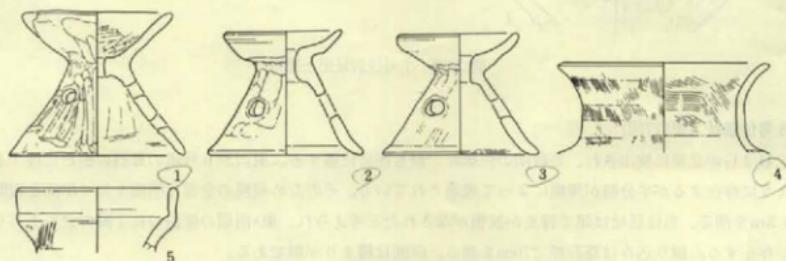
第273図 6号住居址

6号住居址出土遺物（第274図）

1～3は、北辺やや西寄りに集中して出土した3点である。1は、3点の中でやや大振りを呈し、口径9cm器高8.7cm、底径10.4cmを測る。器受部は直線気味に開き、外面へラケズリ、内面へラミガキ。脚柱部はラッパ状に開き端部をやや尖り気味とし、円透は4カ所に施す。外面へラミガキ、内面下部へラケズリ。2は、口径6.8cm、器高7.5cm、底径9cmを測る。器受部は浅く下部に稜を有し、ナデで調整。脚柱部はハの字状に開き端部を短く外反し、外面へラケズリ。円透は3カ所。3は、口径7cm、器高7.3cm、底径9.2cmを測る。器受部は1の様に開くが端部を内傾させる。脚柱部は直線的に開き端部を尖り気味に外反させる。

4は、壺形土器の口縁部で口径12.2cm。

5は、覆土中の出土で壺の口縁部片。口径9.2cm。

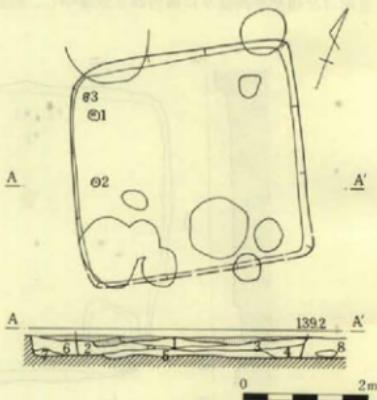


第274図 6号住居址出土遺物

第III章 調査の記録

7号住居址（第275図）

6号墳の北方で6号住居址の西方12mのE2～3Gに位置し、14号住居址にすっぽりと包括される状況で検出された。規模は一辺が3.7mの方形を呈する。掘り込みは35cm前後を測り、緩やかな起伏を呈する床面を有する。炉址・柱穴・周溝は検出されなかった。遺物は西辺際に3点が出土。



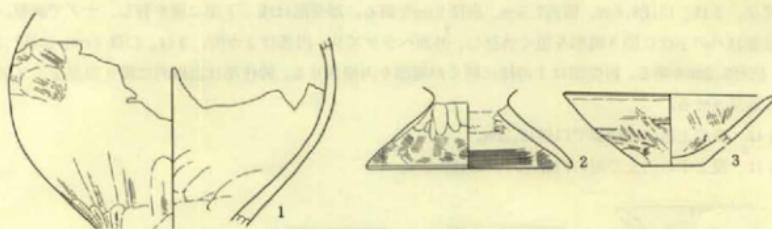
第275図 7号住居址

7号住居址土層誌

1層	Hr—FP・As—Cを含む黒褐色土
2層	As—C・カーボン粒を含む暗褐色土
3層	As—C・ロームBを含む暗褐色土
4層	2に似るがソフト
5層	斑点状にロームBを含む暗褐色土
6層	織りの良い暗褐色土（6～8層は織文）
7層	ローム粒・ロームBの混合土
8層	カーボン粒・ローム粒等を含む暗褐色土

7号住居址出土遺物（第276図）

- 1は、北西隅部の出土で甕の脚部片と考えられるが、台付甕の可能性もある。最大胴部径19.6cmを測る。
- 2は、西辺の中央部で出土。台付甕の脚部で底径12.3cmを測る。
- 3は、1に隣接して出土の壺。口径12.6cm、器高4.3cm、底径3.7cmを測る。

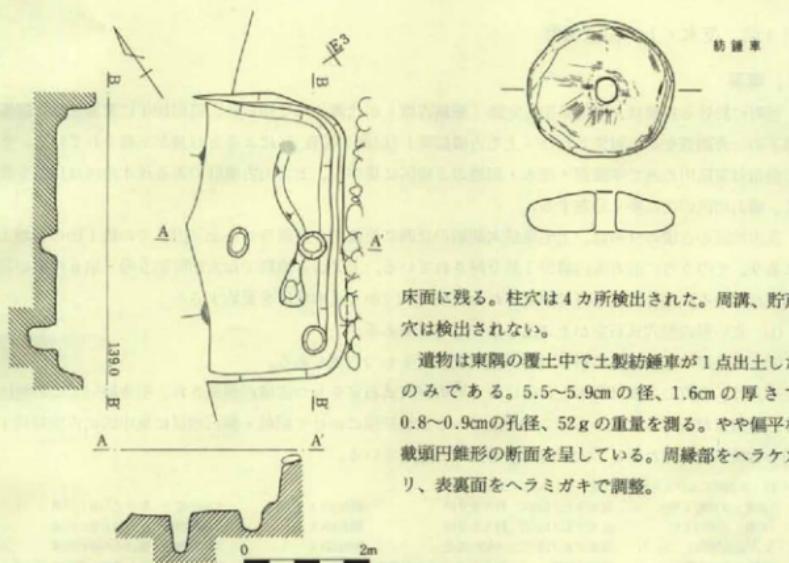


第276図 7号住居址出土遺物

8号住居址（第277図）

D2Gの北東に検出され、当該期の住居址で最も西に位置する。東辺が6号墳の葺石の根石に接するようにならぶが半分強が周溝によって破壊されている。そのため規模の全容は明確を欠くが南北辺間4.5mを測る。当住居址は建て替えか拡張がなされたと考えられ、東・南辺の壁沿いに1段の立ち上がりが存在する。掘り込みは葺石隙で70cmを測る。床面は綺麗で平坦である。

炉址の存在は明確でないが東辺沿いに蛇行する緩やかな段差の東寄り先端に25cmほどの円形に焼土が



第277図 8号住居址、出土遺物

床面に残る。柱穴は4ヵ所検出された。周溝、貯藏穴は検出されない。

遺物は東隅の覆土中で土製紡錘車が1点出土したのみである。5.5~5.9cmの径、1.6cmの厚さで0.8~0.9cmの孔径、52gの重量を測る。やや偏平な縦頭円錐形の断面を呈している。周縁部をヘラケズリ、表裏面をヘラミガキで調整。

第4節 茂木・上ノ山古墳群

1. 概要

当町に於ける古墳は、群馬県指定史跡「堀越古墳」が代表として知られ、昭和10年に実施された群馬県下の一斉調査を基に編集された「上毛古墳綜覧」(以後「綜覧」)によると41基が記載されている。その分布は荒砥川の西で字横沢・茂木・堀越の3地区に集中し、上ノ山古墳群のある茂木地区は11基を数え、横沢地区の次に多く分布する。

茂木地区的古墳の分布は、上毛電鉄大胡駅の北西に位置する長興寺から上ノ山までの約1kmの台地上にあり、そのうちに前方後円墳が1基登録されている。上ノ山古墳群では大胡町第5号・第6号墳が記載されている。そして、当町で調査された古墳(注1)から茂木地区を要約すると

- (1) 古い形の堅穴式石室が上ノ山に集中して3基ある。
- (2) 古い形の古墳の他に新しい形の横穴式石室をもつ古墳もある。

そして、当町の古墳は茂木上ノ山に古い形の堅穴式石室をもつ古墳が構築され、引き続いてこの地区的古墳造営が続けられる一方、7世紀後半～8世紀初頭にかけて堀越・横沢地区に集中的に古墳時代末期の古墳が構築されたと「大胡町誌」(注2)に記している。

(注1) 大胡町における古墳調査一覧

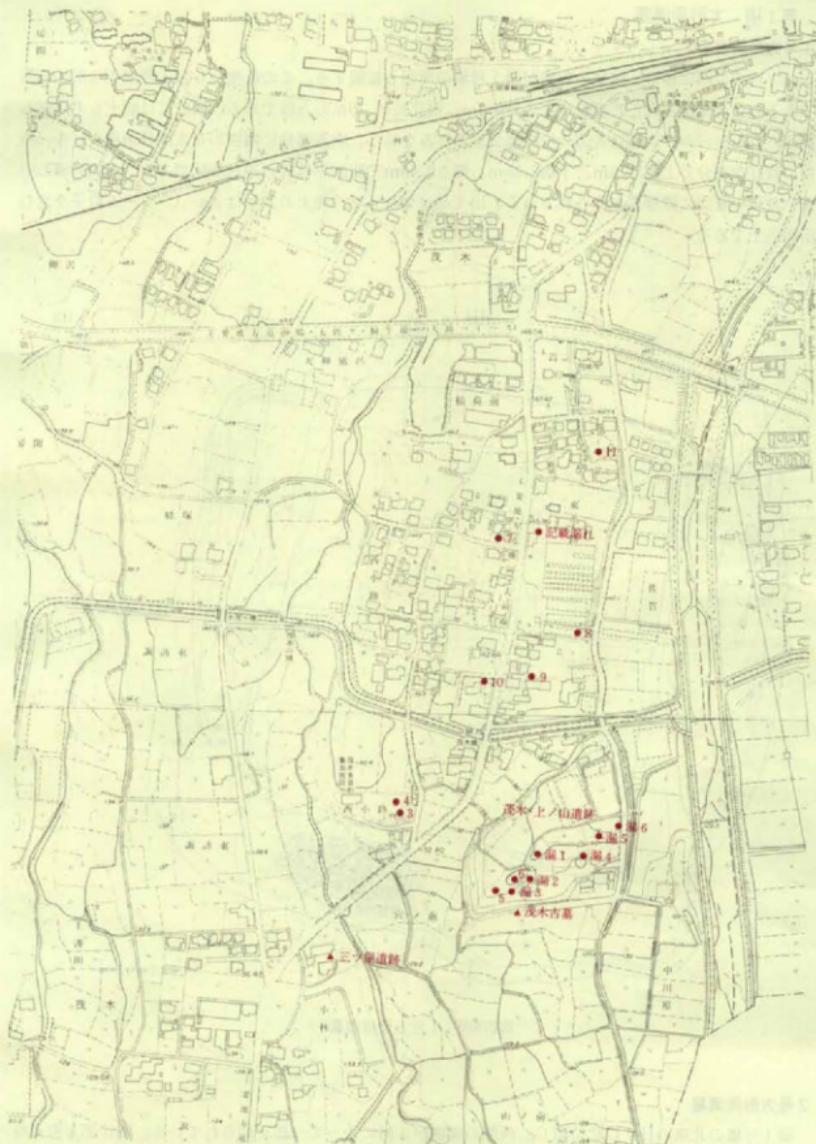
1 「綜覧」大胡町5号	茂木字上ノ山507	群大史学研	昭和32・4	大胡町誌	堅穴式石室の円墳	
2 「綜覧」大胡町6号	茂木字上ノ山507	群大史学研	昭和33・8	大胡町誌等	堅穴式石室の円墳	
3 上ノ山(記載編)	茂木字上ノ山	大胡町教委	昭和47・4	大胡町誌等	堅穴式石室の円墳	
4 堀越(綜覧大胡町15号)	堀越字上ノ山	群大史学研・大胡町教委	昭和30・7 昭和47・8	勢多郡社等	載石積横穴式石室の円墳	
5 「綜覧」大胡町17号	堀越字五十石981	群大史学研・大胡町教委	昭和35・3	大胡町誌	載石積横穴式石室の円墳?	
6 「綜覧」大胡町18号	堀越字五十石976	群大史学研・大胡町教委	昭和35・3	大胡町誌	横穴式石室の円墳	
7 順町(記載編)	堀越字順町	群大史学研・大胡町教委	昭和24・11	大胡町誌	?	
8 横沢1号(綜覧大胡町34号)	横沢字大塚639	大胡町教委	昭和44・8	大胡町誌	横穴式石室の円墳	
9 横沢2号(綜覧大胡町33号)	横沢字大塚632-1	大胡町教委	昭和44・8	大胡町誌	横穴式石室の円墳	
10 五反田(記載編)	横沢字五反田554	群大史学研	昭和35・1	大胡町誌	横穴式石室の円墳	

本調査において「綜覧」大胡町5・6号墳並びに記載漏であった上ノ山古墳(上ノ山漏1号墳に改称)の全面調査を行うと同時に新たに方形周溝墓1～3号、記載漏で堅穴式石室(注3)を伴うもの2基(漏2、3号墳)、横穴式石室を主体部とする古墳(漏4、5号墳)2基、不明1基(漏6号墳)の計5基を検出。さらに単独で大胡町5号墳の下段葺石、9、10号住居址の間、1号方形周溝墓の周溝内の3ヵ所で堅穴式石室3基を確認。さらに、土壙墓2基を検出した。

茂木上ノ山古墳群としては、3基の方形周溝墓・5基の堅穴式石室を伴う古墳・3基の横穴式石室を伴う古墳(1基不明)・3基の単独堅穴式石室・2基の土壙墓が検出された。方形周溝墓は台地の中央平坦部、堅穴式石室の古墳は漏1号墳を北限として南西先端部の大胡町5号墳の間に接するように調査区南西部に集中する。横穴式古墳は調査区東に3基が位置する。単独の堅穴式石室・土壙墓は大胡町5号墳に重複する堅穴式石室を除き、堅穴式石室を伴う古墳の周囲に認められる。

(注2) 大胡町誌「古代」松本浩一昭和51年

(注3) 堅穴系内部主体については、箱式棺状石室・小石室などと呼称されているが町誌に準拠して箱式棺状石室とする。

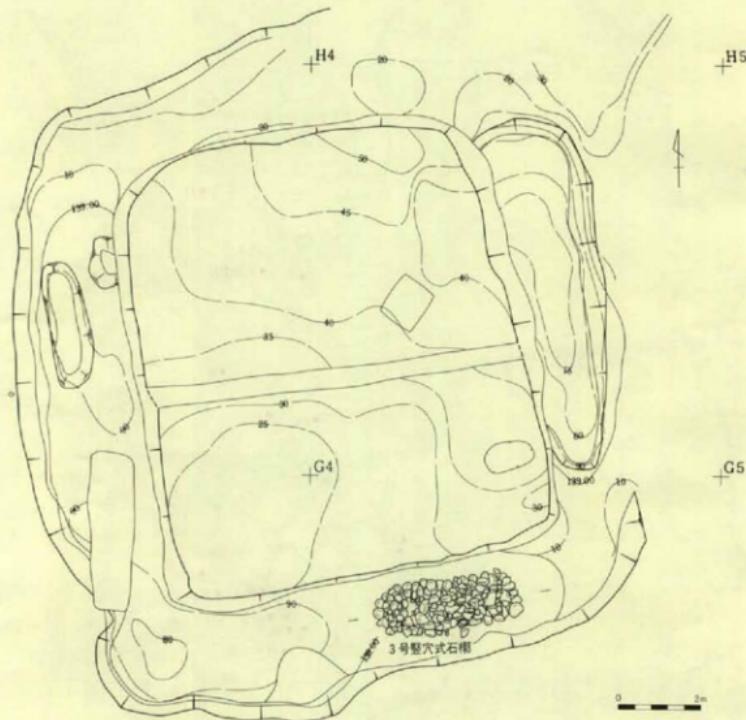


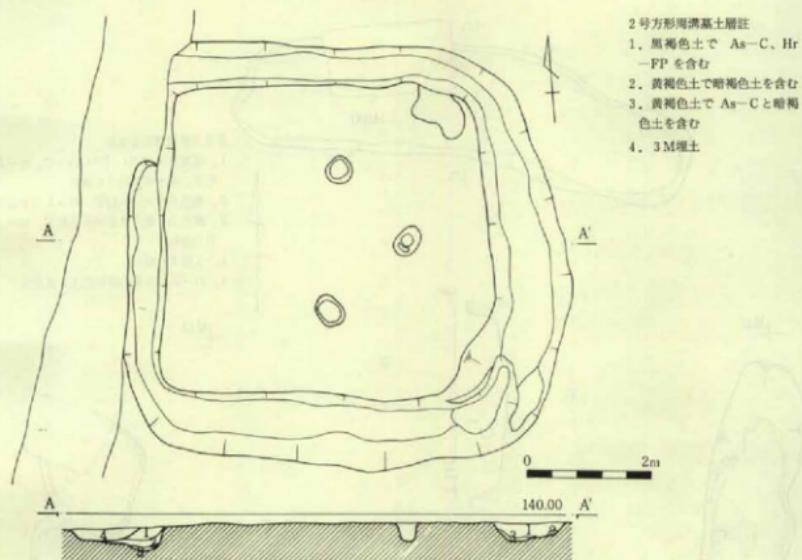
第278図 茂木・上ノ山遺跡周辺の古墳分布図

第1項 方形周溝墓

1号方形周溝墓

漏1号墳の西に接し、東側の周溝が漏1号墳の周溝と重複する。この重複から漏1号墳より前の所産であることが確認された。墳丘は東西長9.0m、南北長10.70mの方形である。墳丘には盛土も主体部も検出されなかった。周溝は各辺の中央部分が膨らみを呈し、南西部分に幅狭の介入部分が見られる。残存の良好な部分で上幅3.10m、下幅2.35m、深さ0.45mで断面形は浅い逆台形状である。南側周溝の中央やや東の底面に礫榔基が作られている。出土品はなかった。埋土の大半はAs-C・ローム粒子を含む暗褐色土である。





第280図 2号方形周溝墓

に溝が巡る。南東部に歪みを呈し、最大幅は1.45mを測る。溝幅は一定でなく、東方から南方にかけて広がり、北方部60cm、南部1.2mで深さ30~40cmを測る。出土遺物は無い。

3号方形周溝墓 (第282図)

調査区の北東に位置する台地の最高所付近のL12、13、M12 Gridに検出され、東から西方向へ緩やかに傾斜を呈し、標高は中央部で141.15mを測る。

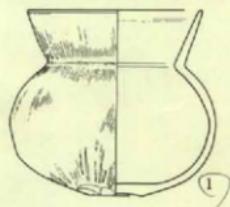
墳丘部の盛土、主体部は検出できなかった。墳丘部の規模は東西長約9.2m、南北長8mを測る方形を呈す。四辺に巡る周溝は、北東部と北西部に途切れ部がある。東辺は中央やや南寄りに残存し、南辺より伸びる周溝と括れ部を設けて接する。この括れ部より南辺は南西コーナー部で西辺と接する。西辺は

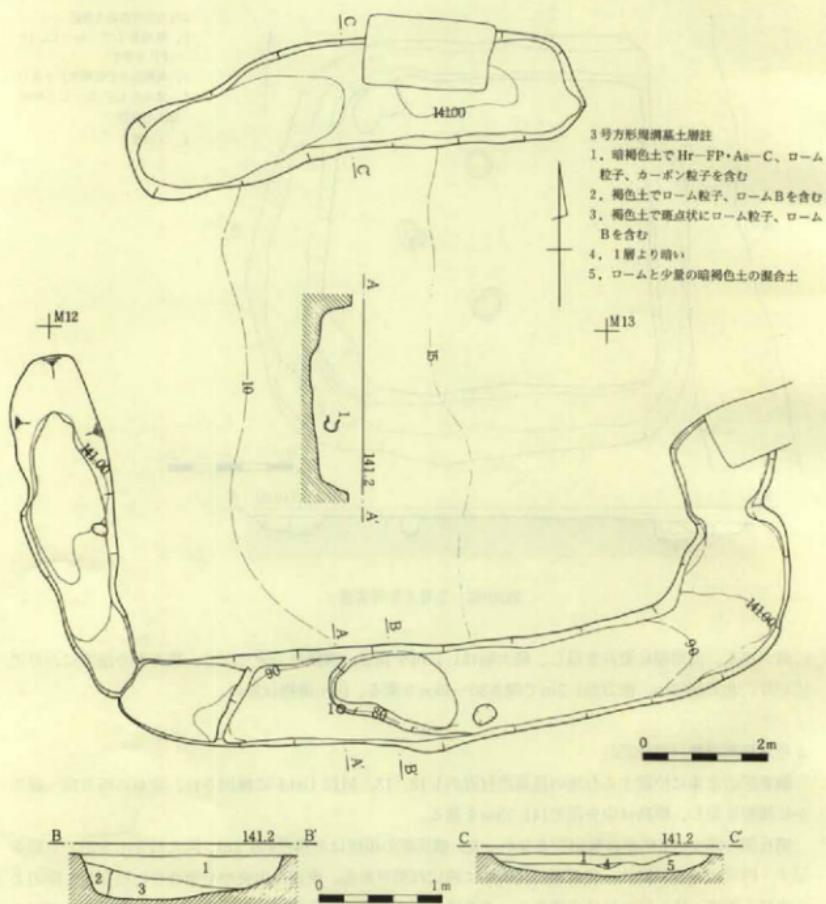
中央やや北まで確認された。北辺部は独立し、一部を攢乱により切られている。長さ7.3mが残存し、幅1.8m前後、深さ中央で20cmを測る。南辺中央やや西寄りで壺形土器(第281図1)が底面より8cmほど浮いて出土した。

3号方形周溝墓出土土器

口径10.5cm、器高11.3cm、底径3.2cmを測る壺形土器で、胸部はやや偏平な球形を呈し、口縁部は直線的に開く。胸部下位はヘラ削り。胸部下半～口縁部はヘラミガキを施す。内面は横ナデ。

第281図 3号方形周溝墓出土遺物





第282図 3号方形周溝基

第2項 壺穴式・横穴式古墳

「線観」大胡町5号墳

昭和32年4月に群馬大学史学研究室によって調査され、詳細は「大胡町誌」「群馬県史資料編3」(注4)に紹介されているのでその概略を記す。

台地南端の傾斜地に構築された円墳で東約23mに6号墳が位置している。葺石は埴丘裾部に確認され、その規模はトレンチで確認された根石を基準として高さ(現墳頂)南側で3.17m、北側2.28m、径14.40mを測る。埴輪は円筒埴輪の破片が散見されるが、はっきりとした配列は認められない。周堀も認められない。

埴丘頂上部に主軸を東西方向にとって3基の箱式棺状石槨が平行して並ぶ。各石槨を発見順に南から1号・3号・2号とした。1号からは管玉3個・鉄錐1本、2号では勾玉1個、3号からは劍1振・銅製小環1個が出土。3号東端から袋槍1本が突き刺した状態で出土。石槨の状態は上記資料に詳しい。各石槨の規模は

1号石槨 長さ 北壁1.97 南壁1.98 幅 東壁0.4	西壁0.31 深さ 東壁0.3
-------------------------------	-----------------

2号石槨 長さ 北壁1.91 南壁1.93 幅 東壁0.35最大0.52	西壁0.27 深さ 東壁0.25
--------------------------------------	------------------

3号石槨 長さ 北壁1.95 南壁1.94 幅 東壁0.43	西壁0.33 深さ 東壁0.2
--------------------------------	-----------------

2号石槨は構築レベル・平面形も異なることから追加構築されたものと考える。そして本古墳の構築年代は6世紀初頭の頃としている。

本調査では河原石を使用した葺石が西方～南方部にかけて2段に施され、北方～東方部に周堀が検出された。さらに、南方下段の葺石部を破壊して追加構築された漏1号箱式棺状石槨を新たに検出した。また、残存していた3号石槨の内部は赤色塗彩が施されていたことを付しておく。

前回の調査と総合すると、上段の葺石は根石を基準にして高さ(石槨検出面)南側で1.45m、北側0.8m、南北径で14.30m、東西径が推定12.50m前後を測る。下段はC1グリッドポイントの西1.5mから漏1号箱式棺状石槨に向けて検出され、半径約9.2mの円弧上に根石を施す。

周堀は北方部で3.8～4.6m幅を測り緩やかな円弧を描くが6号墳に接する北東部は6号墳周堀を意識してか円弧を内湾させ、最も狭い所で1mとなる。そして東方部で再び解放される様に広がり南方部に移行する。深さは最深部で0.7mを測り、北西・南東部で掘込みの立ち上りが消滅している。

埴輪は前回の調査と同様に円筒埴輪の破片が散見されるが、その配列は認められない。

構築はAs-Cを含む暗褐色土(自然堆積)上にロームブロックを含む褐色土・暗褐色土の盛土を南方部に多く積み上げて高まりを作り出している。

これら結果から標高138m付近の南西端部に位置する5号墳は、2段構築の葺石を有し、上段北側の根石から下段南側の根石まで17mを測り、この埴丘の北～東側に周堀を半周させている円墳である。

構築は周堀の掘削土等を南側に多く盛り上げ、さらに西～南側に下段の葺石を巡らせることで、調査区前面に広がる低地からの高まりと大きさを誇示している。

墳頂部の石槨は1・3号が板状の割れ石と河原石、2号は河原石を使用しての箱式棺状石室である。3号には赤色塗彩が施されている。規模は1.9m台を測り、共通して東壁幅が広いことから東を頭として埋葬されたと考えられる。

1・3号がほぼ同時に作られ、2号がやや遅れて追加構築されたと推察されており、中央に位置する

3号を主体に埋葬が考えられた6世紀初頭の頃に構築されたものとするのが妥当であろう。

(注4) 群馬県史 資料編3 原始古代3古墳「綜覧」大胡町5号古墳 松本浩一

「綜覧」大胡町5号墳出土遺物（第284、285図1～26）

遺物の大半は、周堀内の出土である。1は、最大径を胸部中位に有する變形土器。口径16.8cm、最大径22.5cmを測る。胸部は緩やかに内湾して頸部で「く」の字状に屈曲し、口縁部は外反して開く。胸部下半は縦位のヘラケズリ。口縁部はヨコナデを施す。

2は、復元口径18.4cm、器高13.8cm、底径14.2cmを測る高坏。坏部は直線的に開き、体部下半に軽い稜を設ける。脚柱部は中位で膨らみを呈し低く広がる裾部に移行する。坏部内面に放射状暗文を施す。

3は、復元口径13cmを測る坏で、丸底を呈する底部より稜を設け口縁部は、やや外反気味に開く。4～26は埴輪片である。

4は、普通円筒埴輪の口縁部～第2突帯に至る破片で、復元口径は22.2cmを測る。外面縦位、内面横位の刷毛目を施す。

5は、朝顔形円筒埴輪の口縁部片で、復元口径19.8cmを測る。外面縦位、内面横位にやや粗い刷毛目を施す。6～8も口縁部片で、8は、外面縦位、内面斜位の刷毛目を施す。外面には線刻によるヘラ記号が見られる。9も口縁部片に該当する部分と考えられ外面縦位、内面斜位の細かい刷毛目を施す。10、11は、朝顔形円筒埴輪片で外面に細かい刷毛目を施している。12は、外面に縦位の刷毛目を施した後に波状文を描く。13、14は、突帯を付す体部片で外面縦位、内面斜位の刷毛面を施す。17、26は、第1突帯を付す基底部片で17は、外面縦位、内面縦位のナデを施す。26は、底部径で15cmを測る。外面縦位、内面横位と斜位の刷毛目を施す。15、16、18～25は、基底部片で15、18、25は外面縦位、内面斜位と横位の刷毛目を施す。16、19～24は、外面縦位、内面縦位か斜位のナデを施す。

「綜覧」大胡町6号墳

大胡町5号墳と同様に群馬大学史学研究室によって昭和33年8月に調査され、その成果も町誌・県史に紹介済みであるのでその概略を記す。

5号墳の東23m（墳頂間）のところにあり、舌状台地先端に位置している円墳で、葺石を東、西、北に設定したトレーンにより墳丘裾部で確認、その傾斜は東側で25度を呈している。

墳丘の規模は根石を基準として径17.5m、北側で1.65m・南側2.29mの高さを計測。埴輪は円筒埴輪の破片を散見するが配列は認められず、周堀もない。

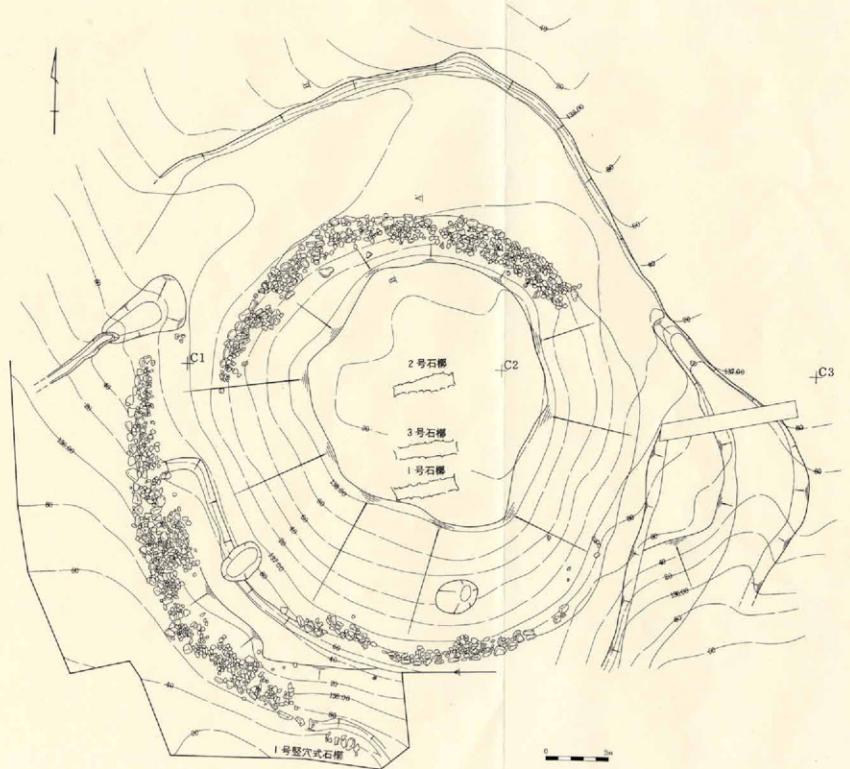
墳丘頂上に主軸を東西方向にとって平行に並ぶ3基の箱式棺状石室を検出し、北から順に1、2、3号とした。その規模は

1号石槨 長さ 北壁1.97 南壁2.05 幅 東壁0.4 西壁0.35 深さ 東壁0.3

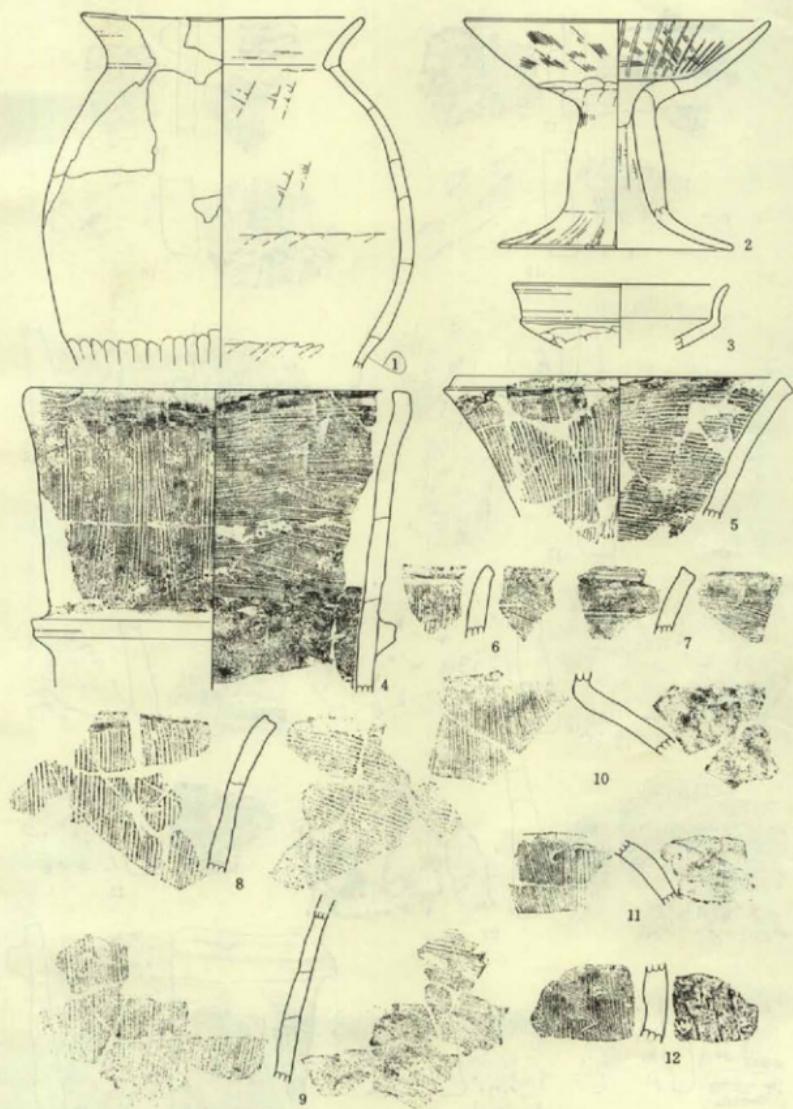
2号石槨 長さ 北壁1.89 南壁1.88 幅 東壁0.32 西壁0.31 深さ 東壁0.25

3号石槨 長さ 北壁1.76 南壁1.73 幅 東壁0.34 西壁0.29 深さ 東壁0.2

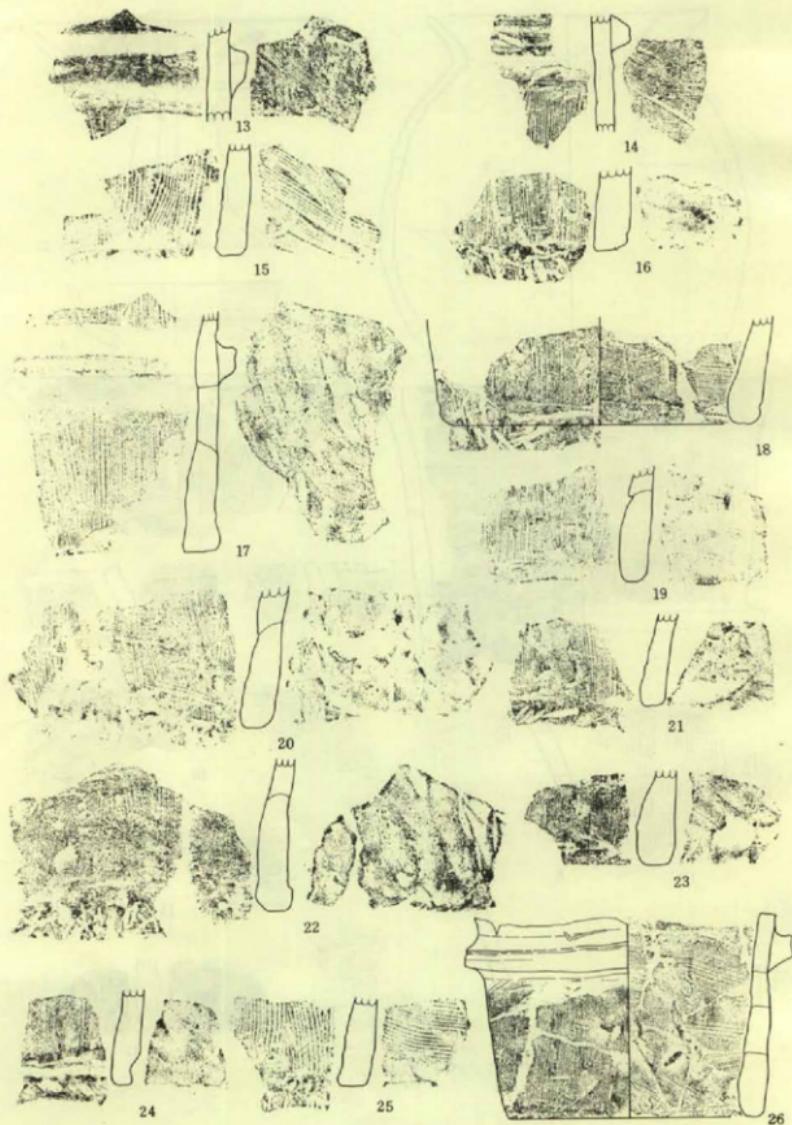
出土遺物は1、3号石槨ではなく、2号石槨に限って出土。小形の彷彿珠文の白銅鏡・刀子・櫛断片・滑石製の有孔円盤・同白玉4個・同勾玉4個・ガラス製小玉4個・同管玉・碧玉製管玉などが出土した。



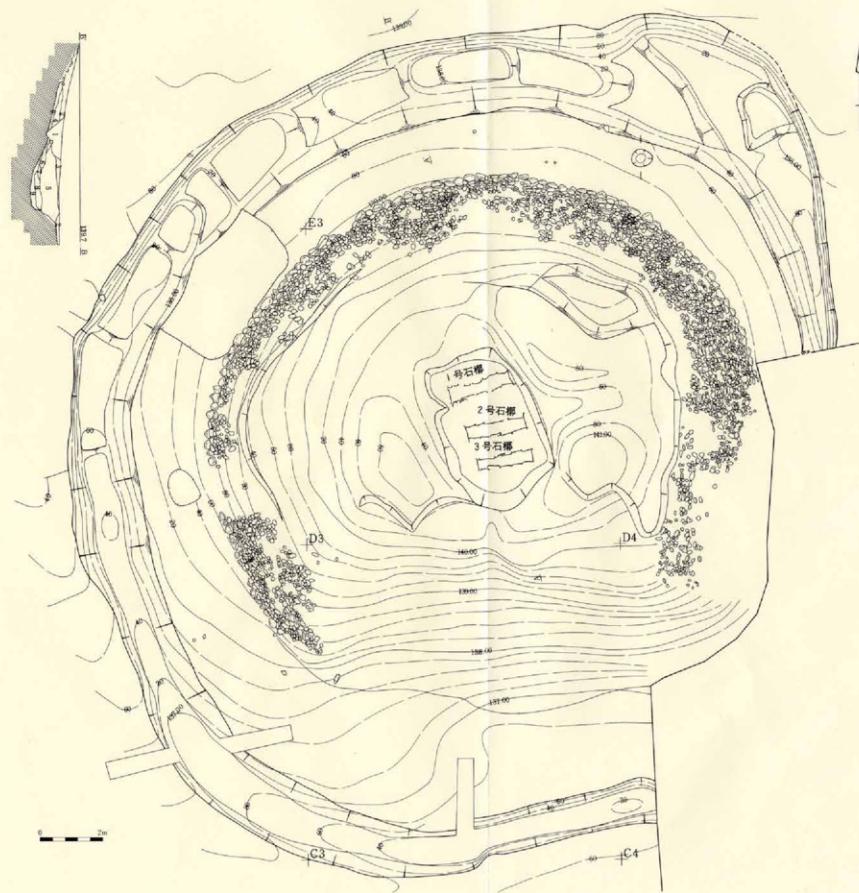
第283図 「綜覽」大胡町5号墳



第284図 「綜覽」大胡町5号墳出土遺物(1)



第285図 「総覧」大胡町5号墳出土遺物(2)



第286図 「綜覽」大胡町6号墳

2、3号石槨はほぼ同時に作られ、1号石槨は構築レベルが他の2基より上がっていることから追加構築したものと考えられ、本古墳の構築年代を6世紀初頭の頃に位置付けている。

本古墳の再調査では河原石を使用した葺石が南方を除いてほぼ連続して検出し、5号墳と同様に存在が否定されていた周堀も確認された。

これらを踏まえて前回の調査と総合すると、南部をやや傾斜地とする台地先端部(墳頂部がD3G)に位置し、5号墳と同様にAs-Cを含む暗褐色土(自然堆積)上にロームブロックを基本とする盛土で墳丘を作り出している。その断面形は截頭円錐形を呈すると想像される。

墳丘裾部は全周するように葺石で覆われていたと推察でき、大きめの根石(最大長50cm)をえ、その上に10~30cmほどの河原石を葺き上げている。残存良好な部分で根石から2.20mほどを測り、その傾斜は20~25度である。墳丘径は根石を基準として17.80mを測る。葺石には6~7カ所の通し目積みが見られる。特に東側で1.2m前後の間隔で2列の積みが確認できる。

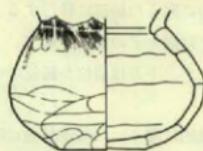
埴輪は前回調査と同様に円筒埴輪の破片が散見できたが、その配列は認められない。

周堀は墳丘裾部の根石と周堀内縁立上りとの間に1.6m(東側)~2.7m(南西部)幅で緩やかに外傾斜するテラス状造構(注5)を挟んで外側に全周するものと考えられる。5号墳が6号墳を意識して周堀幅を北東部で萎縮させていたが、6号墳は漏2号墳を意識して東側の周堀を萎縮させている。南部も東方で狭まる傾向にある。この萎縮部を除いて南部から時計回りに周堀幅を徐々に広げながら北東部に至る。その幅は2m~2.5mを測る。東側の調査区段の周堀幅は1mで、北西方向に周堀外線を直線気味に広げ、北方中央やや東で食い違いに合わせている。掘底は北方中央やや西に平坦な部分を残し、左右にカマボコ形の小区画が続く。

石槨は上記した報告で詳細に記されているが、追加構築された1号石槨を除いて2、3号石槨がほぼ同時に埋葬されたとしている。しかし、根石を基準とする墳丘径17.80mの中央に位置する2号墳がその副葬品からも中心的埋葬者と考える。

(注5) 子持村文化財調査報告 第1集 中ノ峯古墳発掘調査報告書 葺石根石と周堀内縁立上りの平坦部をテラス状造構としている。

「綜覧」大胡町6号墳出土遺物 (第287図)



墳丘部で出土した壺で口縁部を欠く。胴部はそろばん玉状を呈し、底部はやや上げ底とする。胴部中位下はヘラケズリ、頭部はヘラナデの調整を施す。底部径は3.5cm、胴部最大径7.9cmを測る。

第287図 「綜覧」大胡町6号墳出土遺物

上ノ山漏1号墳【上ノ山古墳】(第288図)

本古墳も昭和47年4月に当教育委員会で松本浩一氏を担当として調査済みであり、5、6号墳と同様に紹介済みであるのでその概略を記す。

調査前に墳頂部のほぼ中央に主軸を東西にとる箱式棺状石槨の蓋石がすでに除去され、壁石の一部が露出していた。そのため閉塞の状況は明らかでなく、板状の割れ石を使用して構築している。規模は、長さ 北壁1.94 南壁1.93m、幅 東壁0.5m西壁0.33m、深さ 東0.25mを測る。出土品は鉄片1つを

確認したのみである。

墳丘はすでに削平されていたが、裾部における葺石の一部およびその根石の確認から14.5mを測る円墳であり、深さ1.25m、幅5.5mの周堀の一部を確認。

埴輪の配列は確認できない。

この結果、本古墳は1墳丘に1主体部を有する相異点もあるが5、6号墳と同年代の6世紀初頭の構築と推定するとしている。

前回と今回の再調査を総合すると、本古墳はG5グリットポイント付近に石櫛を配する円墳である。東側では1号住居址と1Mによって周堀の一部が破壊され、西方では1号方形周溝墓の周溝と周堀が重複関係にあり、南においては5号住居址を破壊して周堀が構築されている。

堅穴式石櫛を有する5基の古墳で一番奥まった平坦部分に位置し、前記した5、6号墳同様にAs-Cを含む黒褐色土の上に盛土をして墳丘の高まりを作り出し、墳丘裾部は東半分で確認された様に葺石で覆われていたものと推察される。

葺石は河原石を使用し、良好な部分で10段ほどが残り、その傾斜は20度である。葺石の根石を基準として14.5m前後の墳丘径が測り出される。石櫛は墳丘径の中心より南に1mの所に位置している。埴輪は前回の調査と同じく検出されなかった。

周堀は6号墳と同様に墳丘裾部の根石と周堀内縁立上りとの間にテラス状造構を挟んで外側に全周している。根石の残存良好な場所で1.4mの幅を測る。周堀幅は南方を除き2.4~2.8mを測り、北西部分で括れ部がありブリッジ状部分が残る。周堀外縁幅は東西22.8m、南北25mで南北にやや長い楕円形を呈する平面形となる。

この結果、本古墳はAs-Cを含む黒褐色土の上に盛土をして墳丘を作り出し、河原石によって墳丘裾部を葺いている。石櫛は主軸を東西とする箱式棺状石櫛であることから6世紀初頭の構築年代に位置付けられよう。

上ノ山漏1号墳出土遺物（第289図1~3）

1は、東側周堀内の出土の埴形土器。口径10.4cm、器高15.1cm、底径4.3cm、胴部最大径12.4cmを測る。上げ底の底部より胴部は球状を呈し、頸部で「く」の字状に屈曲して直線的に開く口縁部に移行する。胴部下半～中位はヘラケズリ、中位～頸部は横～斜位ナデ、頸部と口唇部下は横ナデの調整を施す。

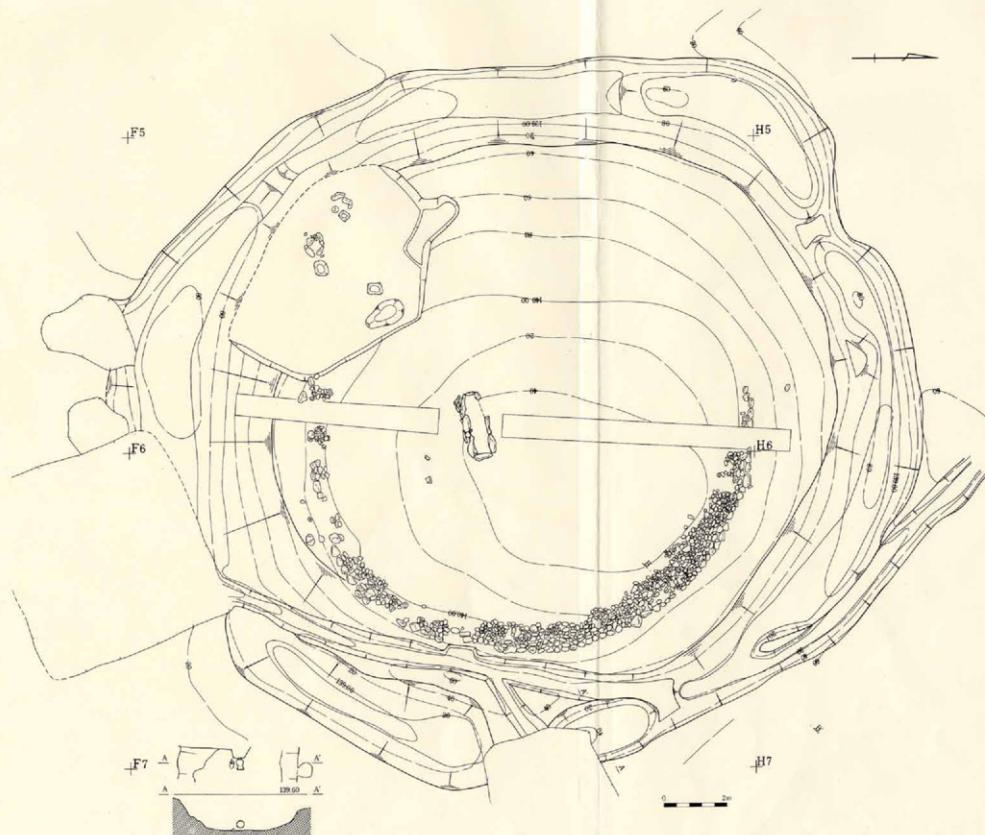
2は、埴形土器の口縁部～頸部片。復元口径10.7cmを測る。口唇部は横ナデ、下方は縦位か斜位のヘラミガキで調整を施す。

3は、高环の环部で口径20cmを測る。环部下半に稜を有し、口縁部は直線的に開く。口縁部外面に暗文状のヘラミガキを施す。

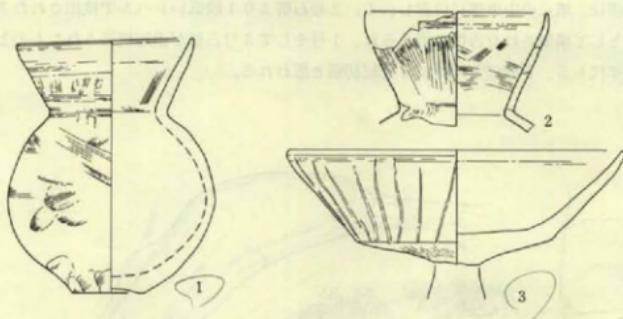
上ノ山漏2号墳（第290図）

本古墳は、6号墳の東に位置する。南から介入する窪地を挟んで高まりを確認するが、墳丘の南半分が宅地用地として調査外でもあり、すでに削平されていた。伐採によって宅地の削平部からは3m、北側からは1mを測り、その高まりは低いものの古墳であろうと考えられた。

D5Gの北東部を墳頂部として西に6号墳が接し、北に5号住居址を挟んで漏1号墳があり、6号墳との墳頂間20m、漏1号墳との墳頂間24mを測る。



第288図 上ノ山塚1号墳



第289図 上ノ山洞1号墳出土遺物

墳丘は部分的に削平されているが As-Cを含む黒褐色土上にロームブロックと暗褐色土の混合土の盛土で作り出し、裾部に河原石を利用して葺石を施す。その傾斜は西方で20度ほどである。葺石の残存は良好とは言えないがその根石を基準として13.6mの墳丘径を測る円墳である。埴輪は検出されなかった。

墳丘頂部では、東西方向を主軸とする2基と南北方向を主軸とする1基の計3基の竪穴式石槨を検出した。これを発見順に北から1号、2号(南北軸を主軸とする)、3号石槨とした。

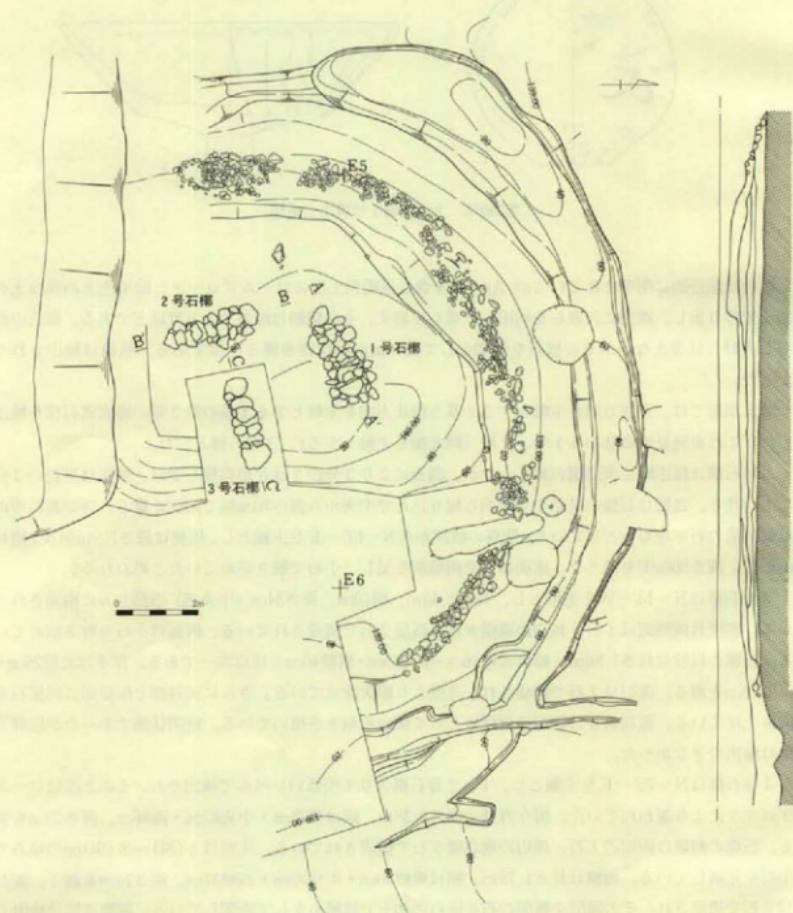
1号石槨は検出時に未盗掘の感あったが、調査により3分の2ほどが盜掘を受け、残存は東側の3分の1が残る。盜掘は石槨中央部やや東から掘り込んで中央から西へ70cm幅で床面を貫き、再び蓋石等の石槨構築の石を埋めもどしている。残存の状況からN-67°-Eを主軸とし、規模は長さ1.9m前後、幅40cm前後、深さ30cm弱を測る。床面はやや西傾斜を呈し、小石で敷き詰めていたと思われる。

2号石槨はN-13°-Wを主軸とし、長さ2.40m、幅70cm、深さ34cm(中央部)の掘り方に構築されている。側壁は両短辺は1石、長辺の東壁8石・西壁7石で構成されている。床面は小石を敷き詰めている。石槨の規模は長さ1.86m、幅は北壁46cm・中央45cm・南壁46cmとほぼ均一である。深さは北壁26cm・南壁22cmを測る。蓋石は7石で構成され、北壁より順次乗せている。さらに天井部と側壁部に河原石を積み上げている。蓋石並びに側石の目締めとして灰白色粘土を用いている。密閉状態であったが副葬遺物は検出できなかった。

3号石槨はN-75°-Eを主軸とし、1、2号石槨より1段低いレベルで検出され、その上面はロームブロックにより覆われていた。掘り方は、長さ2.38m、幅は東72cm・中央83cm・西86cm、深さ28cmを測る。石槨の側壁は両短辺1石、長辺の南北壁5石で構成されている。床面は4(西)～8(東)cmの厚みで小石を充填している。規模は長さ1.78m、幅は東壁40cm・中央32cm・西壁37cm、深さ20cmを測る。蓋石は5石で構成され、その隙間を数個の石と灰白色粘土で目締めをして密閉している。副葬遺物は検出できなかった。

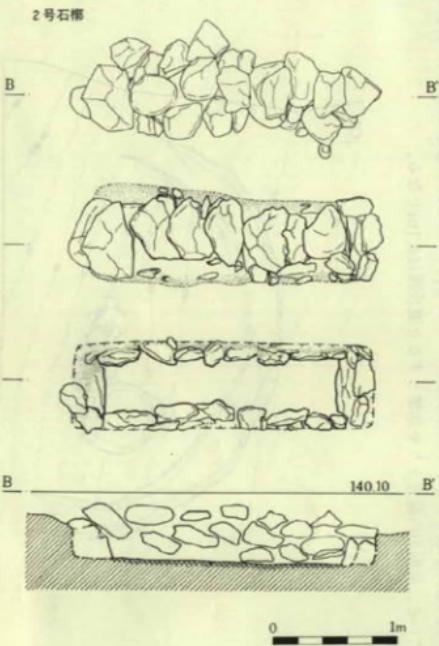
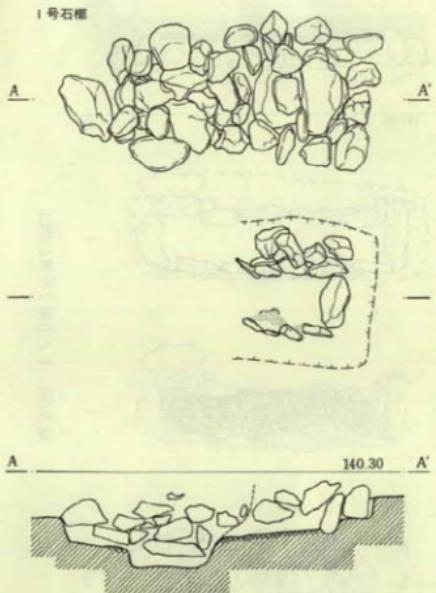
周堀は、調査区内では0.6～1.8m幅のテラス状遺構を挟んで検出された。東方部には1Mと重複する部分がみられる。周堀は東～北方部分で1.2～1.8mを測り、6号墳の周堀と境を接する部分は最小幅65cmで急に堀幅を減じるが、北西部分ではやや解放気味に2、3mと広がりが見られる。

漏2号墳は、墳丘の中央部に位置し、1、2号石槨より1段低いレベルで検出された3号石槨を中心的埋葬者として構築された古墳と考えられ、1号そして3号石槨が追加構築されたものと推察される。その構築年代も5、6号墳と同様に6世紀初頭と思われる。

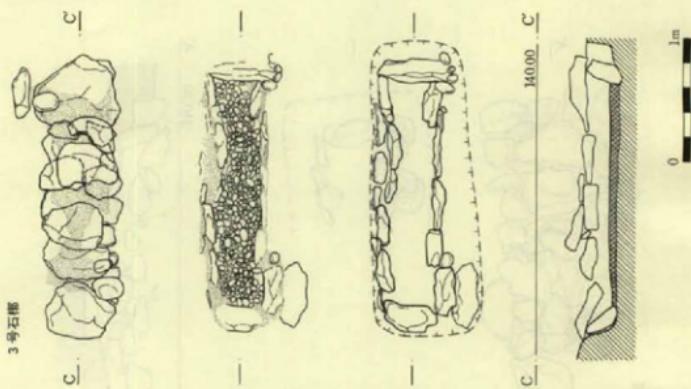


第290図 上ノ山漏2号墳

第4節 茂木・上ノ山古墳群



第291図 上ノ山塚 2号石槨(石槨1)

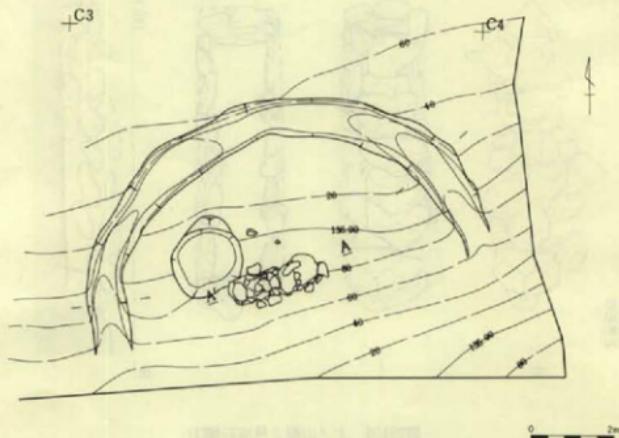


第292図 上ノ山漏2号墳石室(2)

上ノ山漏3号墳

本古墳は5号墳と6号墳に挟まれ南前面に位置するB 3 Gの傾斜地で標高135.80mに主体部を構築する円墳である。調査前もその高まりはまったく確認できなく、新たに検出されたものである。

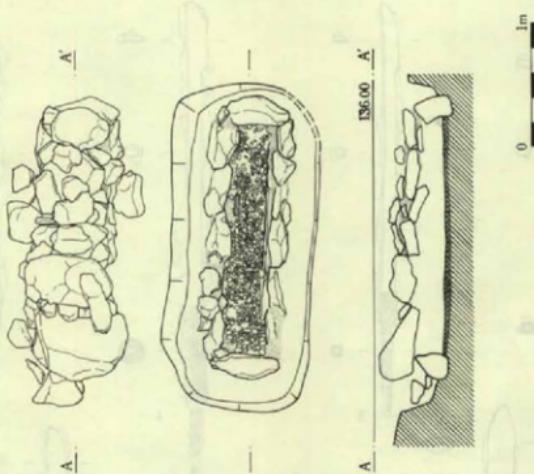
墳丘は調査でも盛土を確認することはできなかつたし、葺石の存在も確認できない。周堀は主体部の北側に巡る約半分が検出された。その堀幅は0.9~1mを測り、東と西の端部は南傾斜に吸収されるよう消滅している。周堀の内縁立上りを基準とすると墳丘径は4.1mとなる。



第293図 上ノ山漏3号墳

主体部は墳丘径の中心に東西の方向に構築され、その主軸はN-68°-Eを呈する箱式棺状石槨である。石槨は長さ2.63m、幅1.15m、深さ0.4mの掘り方に構築されている。その側壁構成は両短辺1石、長辺の北壁6石・南壁5石で構成されている。床面は小石を4cmほど厚みでほぼ平坦に敷いてある。規模は長さ1.92m、幅は東壁40cm・中央36cm・西壁35cm、深さ23cmを測る。蓋石は6石で構成され、その隙間を灰白色粘土と河原石で目止めを施して密閉している。副葬遺物は北沿いに1振りの直刀と南壁中央やや西で7本の鉄鎌が密着して出土した。

この結果、本古墳は6号墳の南裾部分から削平されていた為に墳丘の確認はできなかったが、低いものの山寄せに高まりを作り出していたものと考えられる。石棺等から5、6号墳とさほど時間差のない6世紀初頭の構築年代が推察される。

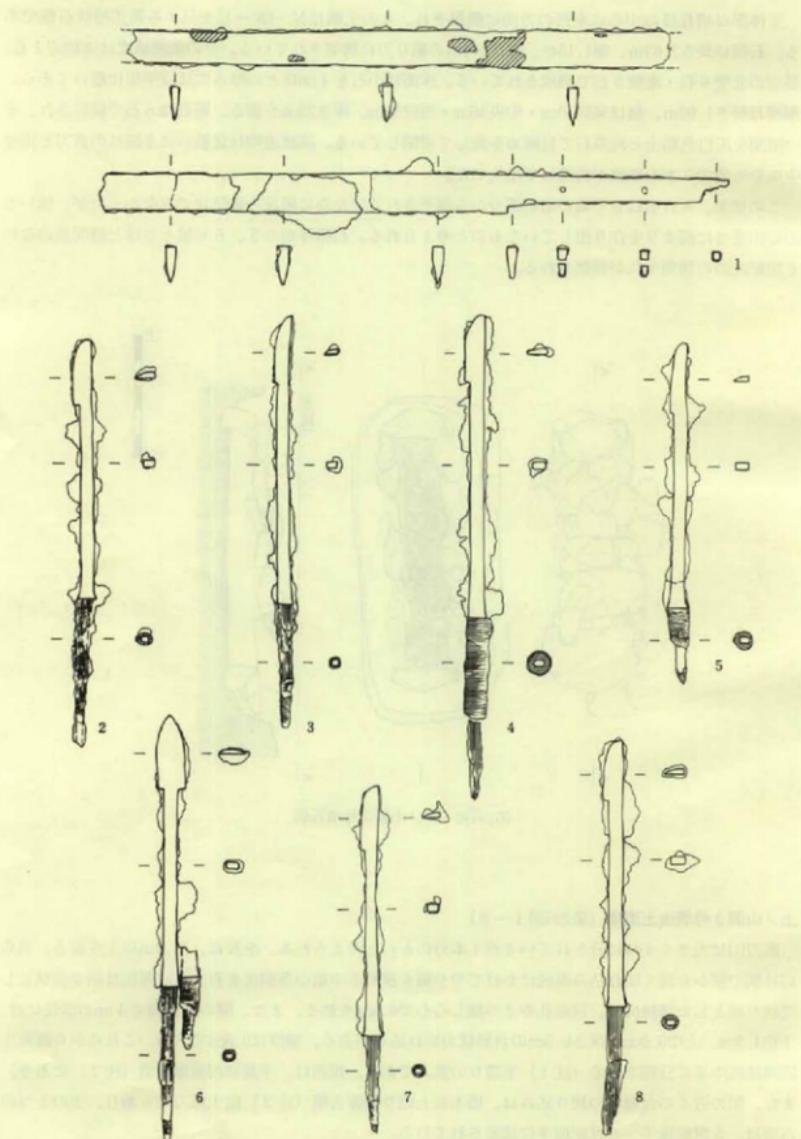


第294図 上ノ山漏 3号墳石槨

上ノ山漏 3号墳出土遺物（第295図1～8）

直刀(1)は大きく4つに分かれているが1本分のものと考えられる。全長は、75.3cm以上を測る。直角の片闊で闊から浅く切れ込み茎尻にかけてやや幅を狭める中細の茎胴部を有する。茎尻は隅を弧状にして抉り落とした隅抉尻で、目釘孔を2つ施し心心で6.6cmを測る。また、闊の茎尻側で1cmの部位には、下巾1.3cm、上巾0.9cm、深さ0.5cmの台形状の切れ込みがある。棟厚は0.8cmである。これらから直角片闊隅抉尻中茎に分類される（注1）平造りの鉄刀である。類例は、千葉県河原塚古墳（注2）にある。また、闊の近くの台形状の抉り込みは、栃木県七廻り鏡塚古墳（注3）出土直刀にもあり、この2つの古墳は、5世紀後半～6世紀前半に比定されている。

鉄鎌（2～8）長頭長三角形鎌1本と長頭片刃鎌6本の組み合わせである。



第295図 上ノ山洞3号填出土遺物

長頸長三角形鐵は、鐵身は片丸造で鐵身間は角闊を呈し、台形闊である。

長頸片刃鐵は、鐵身は平片刃造で鐵身間は角闊を呈し、台形闊である。鐵身長は2.5cm前後ではほぼ一定するが、頭部長は7.5~8.1cm（4本）と8.9~9.5cm（2本）の長短の2種類がある。4、5、8には矢竹の上に樹皮巻が認められる。

	全長	刃長	刃幅	椎厚	茎長	茎幅	株厚	重量
1	75.3	57.6	3.1	0.8	17.7	2.6	0.65	672

刃幅・刃部株厚・茎幅・茎部株厚とともに最大値を提示した。重量は納込みの数値である。単位は、全長~株厚までcm、重量はg。

	全長	鐵身長	頭部長	鐵身幅	頭部幅	鐵身厚	頭部厚	重量
2	16.3	2.6	7.8	0.8	0.5	0.25	0.3	14
3	16.6	2.7	8.9	0.6	0.5	0.2	0.3	14
4	19.5	2.7	9.5	0.8	0.55	0.25	0.3	21
5	13.6	2.8	7.85	0.6	0.55	0.2	0.3	14
6	17.2	2.9	8.0	1.1	0.55	0.2	0.3	17
7	14.0	2.6	7.55	0.7	0.5	0.2	0.3	14
8	16.0	2.5	8.3	0.8	0.6	0.2	0.3	17

単位は、全長~頭部厚までのcm。重量はg。全長は頭の欠損部を含まない値。重量は鈴の分も含んだ値。

出土遺物の年代について

直刀については前述したように5世紀後半を中心とする時期に比定され、鐵も台形闊を呈し鐵身間部も明瞭に角闊状を有するなど該期に比定される鐵としてよい。

遺物からみた古墳の年代は5世紀後半を中心として6世紀前半まで幅をもたせて考えておきたい。

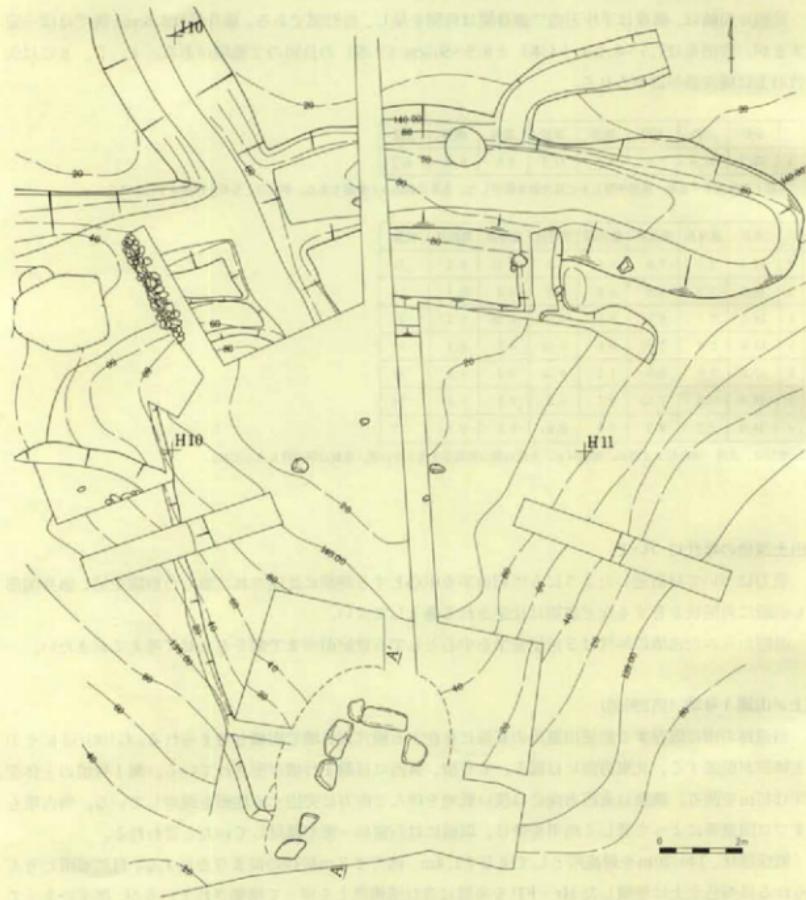
上ノ山漏4号墳（第296図）

当遺跡の南に既存する勅使川原氏の真裏に存在する横穴式古墳で円墳と考えられる。G10Gridにその主体部が位置する。北東方向には漏5、6号墳、真西には漏1号墳が配されている。漏1号墳の主体部間は45mを測る。構築は東西方向には浅い低地を挟んで南方に突出する地形を選地している。当古墳もすでに開墾等によって著しく削平を受け、以前には石室の一部が露見していたと言われる。

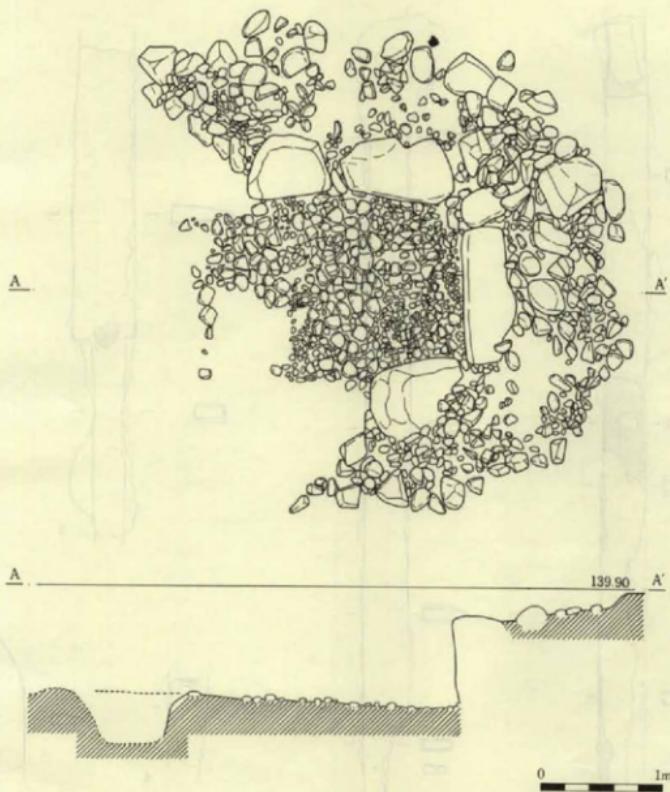
墳丘部は、140.20mを最高所として東方で1.4m、西方で2m前後の高まりを呈する。自然堆積と考えられる黒褐色土上に堆積したHr—FPを多量に含む暗褐色土を穿って構築されているが、削平によって上部の盛土の状況は不明である。

周堀は墳丘の北側に確認されたが、9、10Mによって一部が切断され、東方は傾斜地に向けて取束し、北西部では近世の所産と考えられる石積と地下式土壤によって破壊されている。規模は、最大上幅3.8m、下幅2.7m、深さ60cmを測る。

主体部は、自然石（河原石）乱石積による横穴式石室で玄室の一部を除き大半が形状をとどめていない。辛うじて残存したのは玄室の奥壁と右壁1石、左壁2石の根石である。その玄室の奥幅の規模は1.25mを測る。明確ではないがこれらの残存からS—14'—Wに開口していたと考えられる。床面は小砾を密に敷き詰めている。



第296図 上ノ山瀬 4号墳

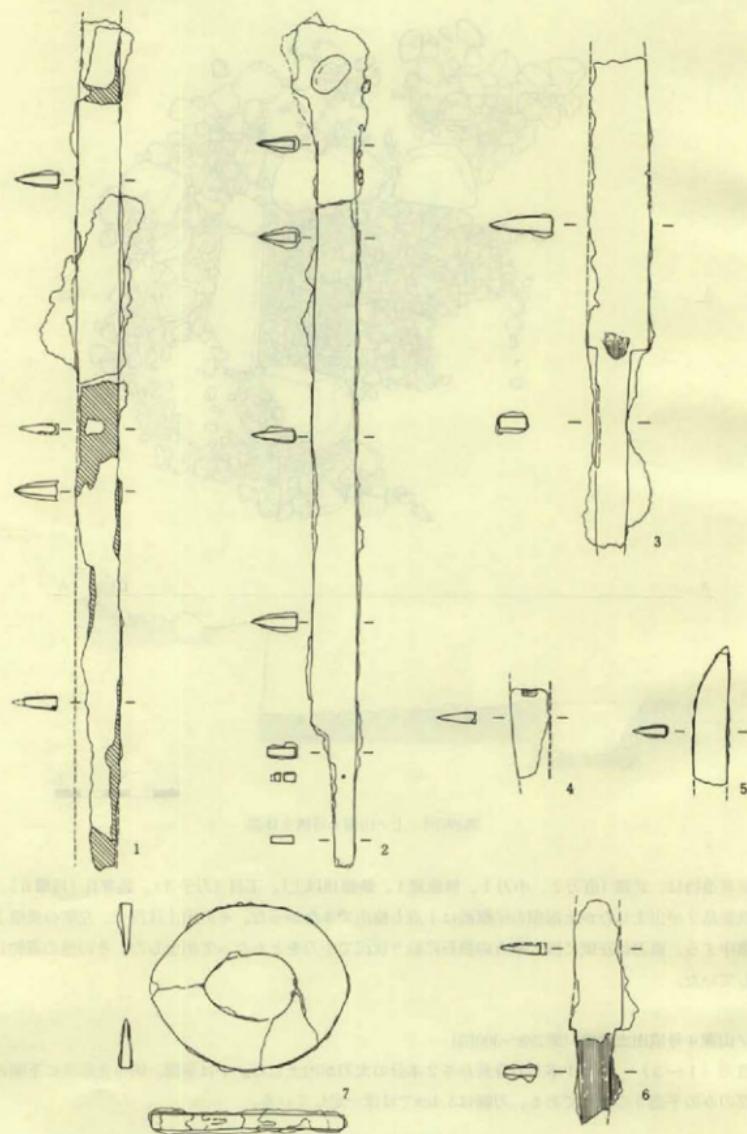


第297図 上ノ山漏4号墳主体部

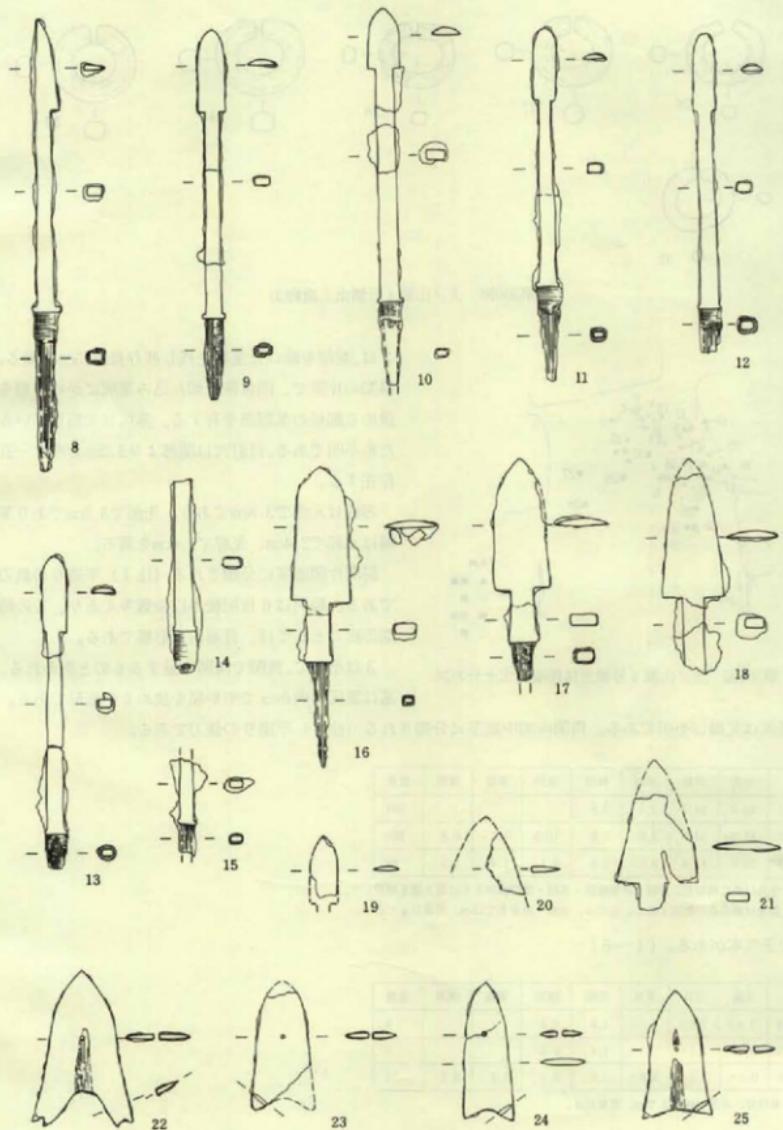
副葬遺物は、武器（直刀2、小刀1、無窓鉤1、鐵鎌18以上）、工具（刀子3）、装身具（耳環6）、不明鉄製品2が出土したが土器類の供獻器は1点も検出できなかった。その出土状況は、左壁の奥壁より集中する。直刀は左壁に残る南方の根石に沿う状況で小刀をともなって出土した。その他の遺物は散乱していた。

上ノ山漏4号墳出土遺物（第298～300図）

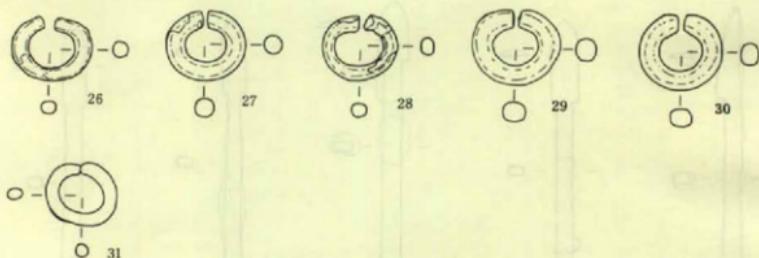
直刀（1～3） 小刀1本と刀身長から2本分の太刀が出土した。1は茎部、切っ先部共に不明の刀身部のみの平造りの鐵刀である。刀幅は3.4cmでほぼ一定している。



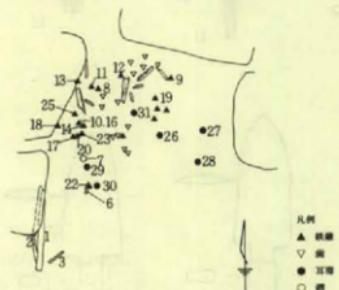
第298図 上ノ山洞 4号填出土遺物(1)



第299図 上ノ山漏 4号墳出土遺物(2)



第300図 上ノ山漏4号墳出土遺物(3)



第301図 上ノ山漏4号墳主体部遺物出土分布図

茎尻は欠損し不明である。角関両関中細茎に分類される（注1）平造りの鉄刀である。

2は、端部を除いた茎部を残し残存長67.5cmを測る。斜関の片関で、関は深く切れ込み茎尻にかけて幅を狭める細形の茎脚部を有する。茎尻は欠損しているため不明である。目釘穴は関部より3.2cmの所に一孔存在する。

刃幅は元部で3.8cmであり、先部で3.2cmであり茎幅は元部で2.4cm、先部で1.6cmを測る。

斜関片関細茎に分類される（注1）平造りの鉄刀である。類例は6世紀後半以後数多くあり、この時期の直刀としては、普遍的な形態である。

3は小刀で、角関で両関を呈するものと思われる。茎は茎尻に向かってやや幅を狭める中細形である。

全長は共に残存長。刃幅・刃部極厚・茎幅・茎部極厚とともに最大値を提示した。

重量は鍛込みの数値である。単位は、全長～極厚まではcm、重量はgである。

刀子3本がある。（4～6）

	全長	刃長	刃幅	極厚	茎長	茎幅	極厚	重量
1	68.3	68.3	3.4	0.8				594
2	67.5	50.0	3.8	0.8	10.5	2.4	0.8	960
3	20.0	11.9	2.5	0.6	8.1	1.4	0.5	98

単位は、全長～極厚まではcm、重量はg。

無窓鉄 (7)

直刀1、2のいずれかに付く窓のない鉄である。側縁部には木質痕跡がある。

	長径	短径	孔長径	孔短径	幅	側縁厚	内縁厚	重量
7	7.9	6.8	3.7	2.75	2.1	0.6	0.15	48

単位は、長径～内縁厚まではcm、重量はg。ただし、鍛込みの数値である。

鉄鏡 (8～25)

長頸片刃鏡1本、長頸長三角形鏡6本+、有頸長三角形鏡4本+、無茎脇抉長三角形鏡4本の組み合わせで、他に頸茎部破片7点がある。

長頸片刃鏡(8)は、刃部が長めで鏡身間は角闊を呈する。棘状突起を有する。後期全般に多く出土する鏡である。

長頸長三角形鏡(9～13、19)は、頸部の長さが8cmを中心に各個体で長短がある。また、鏡身がやや短くなったもの(10)がある。片丸造りで鏡身間は角闊を呈し棘状突起を鏡部に有する。後期全般に多く出土する鏡である。

有頸長三角形鏡(16～18、20、21)は、刃部の側縁が外方にほとんど開かずほぼ直線状に垂下するもの(16、17)と外方に開くもの(18、21)の大きく2つに分けられる。頸部が残っている例からすれば棘状の突起を鏡部に有するようである。全て平造りである。後期全般に長頸鏡との組み合わせで出土する鏡である。

無茎脇抉長三角形鏡(22～25)は、1個ずつ個体差がある。24は細身のもので、23、25は全体の形は似ているが、23は大形で重ね抉りを有するもので逆刺が他の3本に比べて深い。25は側縁がやや内湾する。共通するのは平造りで鏡身部や上半に一孔を有し、23～25は逆刺が浅いことである。22、25は縦脇孔まで抉み込んだ木質が良く残存している。TK10併行期頃から特にTK43併行期に盛行する関東地方に地域性を有する鏡である。

	全長	鏡身長	頸部長	鏡身幅	頸部幅	鏡身厚	頸部厚	重量
8	18.4	3.7	8.2	0.95	0.7	0.2	0.4	21
9	14.9	3.3	8.3	1.15	0.6	0.25	0.35	
10	15.2	2.45	8.4	1.3	0.8	0.3	0.4	
11	14.2	2.95	7.5	0.9	0.7	0.2	0.35	11
12	12.9	3.1	8.0	0.9	0.75	0.2	0.4	13
13	12.6	3.1	8.1	0.95	0.65	0.2	0.3	
16	12.2	5.5	2.35	2.4	0.9	0.3	0.4	
17	9.1+	5.3	2.1	2.25	1.1	0.3	0.45	14
18	6.1+	5.1+	3.0+	2.5	0.8	0.3	0.4	16
21	4.7+	3.6+	1.1+	3.1	1.0	0.3	0.35	
22	6.4	6.4		3.9		0.2		12
23	4.8+	4.8+		2.3		0.2		7
24	5.7	5.7		2.0		0.2		6
25	5.15	5.15		2.7		0.2		

単位は全長～頸部厚まではcm、重量はg。鍛込みの数値である。重量で数値のないものは計測不能。

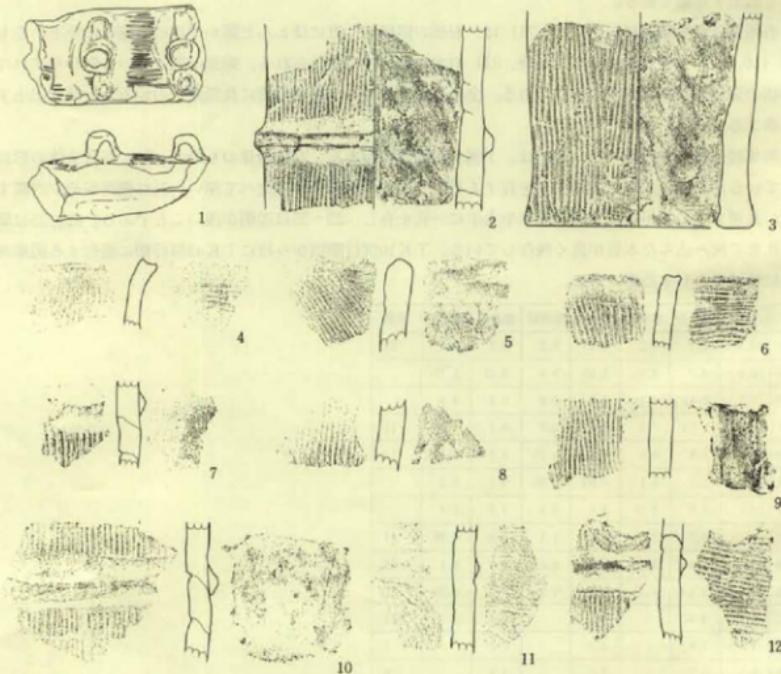
耳環 (26~31)

金環 (26~30) の5個。いずれも洞を芯にし、金を張ったものである。張金の一部が剥がれているものが多い。長径3.5cm、短径3.0cm、重量30g前後のもの (29, 30)、長径3cm、短径2.6cm、重量12g前後のもの (26, 28) 一対ずつ、長径3.1cm、短径2.8cm、重量21g (27) のもの1個がある。

鉄環 (31) 1個。鉄棒を折り曲げて環状にしたもの。長径2.9cm、短径2.5cmを呈する。石が付着しているために測定はできない。

出土遺物の年代

前述したように直刀・鉄鎌とともにTK43併行期の特徴をしめしており、遺物から判断して6世紀後半に比定できると考えられる。



第302図 上ノ山塚4号墳埴輪部出土埴輪

上ノ山漏5号墳（303図）

J11 Grid にその主体部が位置する横穴式古墳。墳丘部はその大半が開墾により削平され、調査前にはその存在すら明らかでなかった。調査の開始と共に地権者との談話中にその存在を知った。すでに石室の天井石も除去されているとのことであった。

調査によって地権者の談話の通りに墳丘部は削平され、主体部も天井石も除去され根石が残存するのみであった。

墳丘は直径約15mの円墳と考えられ、墳丘は西部で約50cmの高まりを有する。周堀は北西部にかろうじて半月状に検出された。その規模は最大上幅1.9m、下幅50cm、深さ約30cmを測る。

石室は自然石（河原石）乱石積と考えられる両袖形石室でS—2°—Eに開口する。すべての蓋石は除去され、玄室の奥壁並びに左壁の側壁、羨道の左壁開口部の根石もすでに除去されていた。

石室の規模は、全長約4.5m、玄室長は右壁で約2.2m、左壁で約2.25m、同奥幅90cm、同前幅1.1m、羨道長は右壁で2m、左壁は不明、同奥幅70cm、同前幅不明である。

石室床は羨道部に人頭大の河原石を主体とし、玄室は小砾を敷き並べている。石室内からの出土遺物は皆無であった。

上ノ山漏6号墳（第304図）

上ノ山5号墳の東で調査区の最も東方に位置する。その存在は、漏5号墳と同様に調査前には確認されていなかったが、切り通し状に作り出された馬入れの断面によってその存在が確認された。

その主体部は、台地の東縁を南北に通過する道路部分に位置したと考えられる。確認されたのは、北辺と西辺の周堀の一部であった。北辺の周堀は馬入れの構築により削平されている為に、外縁の立ち上がり部分が残存する。掘り込み面は面やかなスロープを呈している。西辺の周堀は最大上幅7.6m、下幅50cm、最深部60cmを測り、立ち上がりは底面より外縁が緩慢で、内縁は直線的とする。

全体の規模、主体部はその大半が消滅していると考えられないので不確定であるが方形周溝墓の可能性も考えられる。

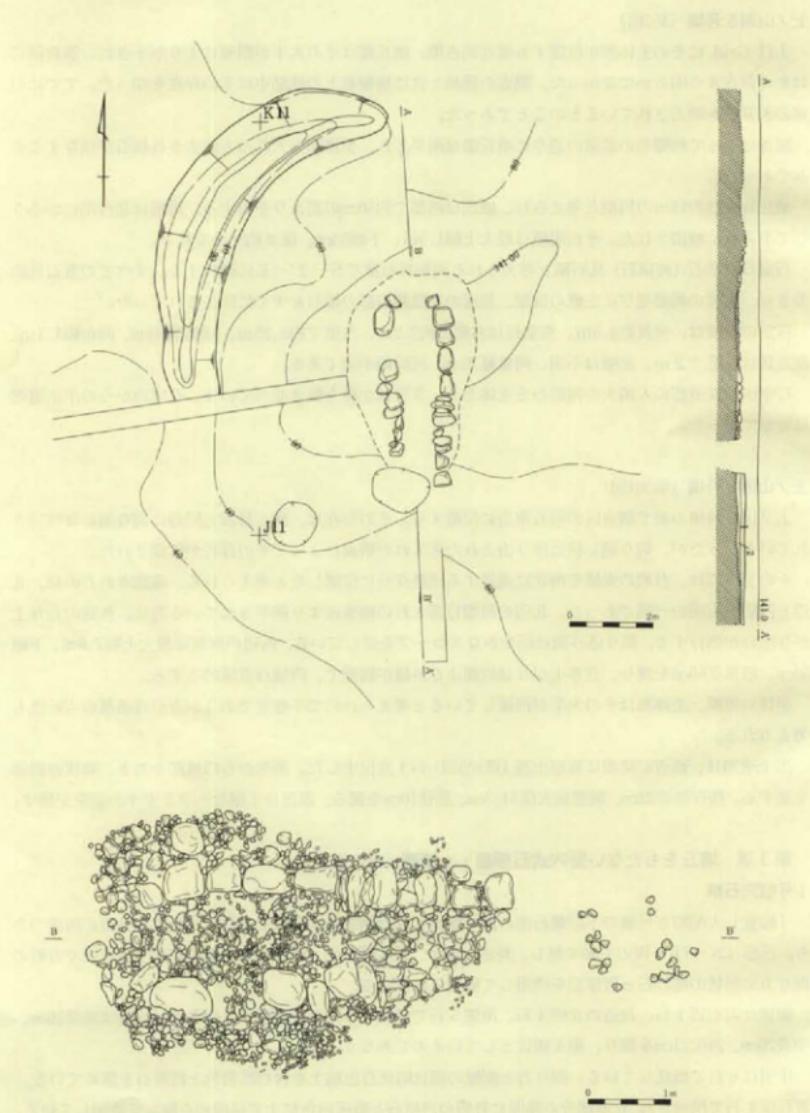
出土遺物は、西辺の周堀に壺形土器（第305図）が1点出土した。頸部から口縁部を欠き、球状の胴部を呈する。残存器高32cm、胴部最大径34.3cm、底径10cmを測る。器面は丁寧なヘラミガキの調整を施す。

第3項 墳丘をもたない竪穴式石槨墓・土塙墓（第306図）**1号竪穴石槨**

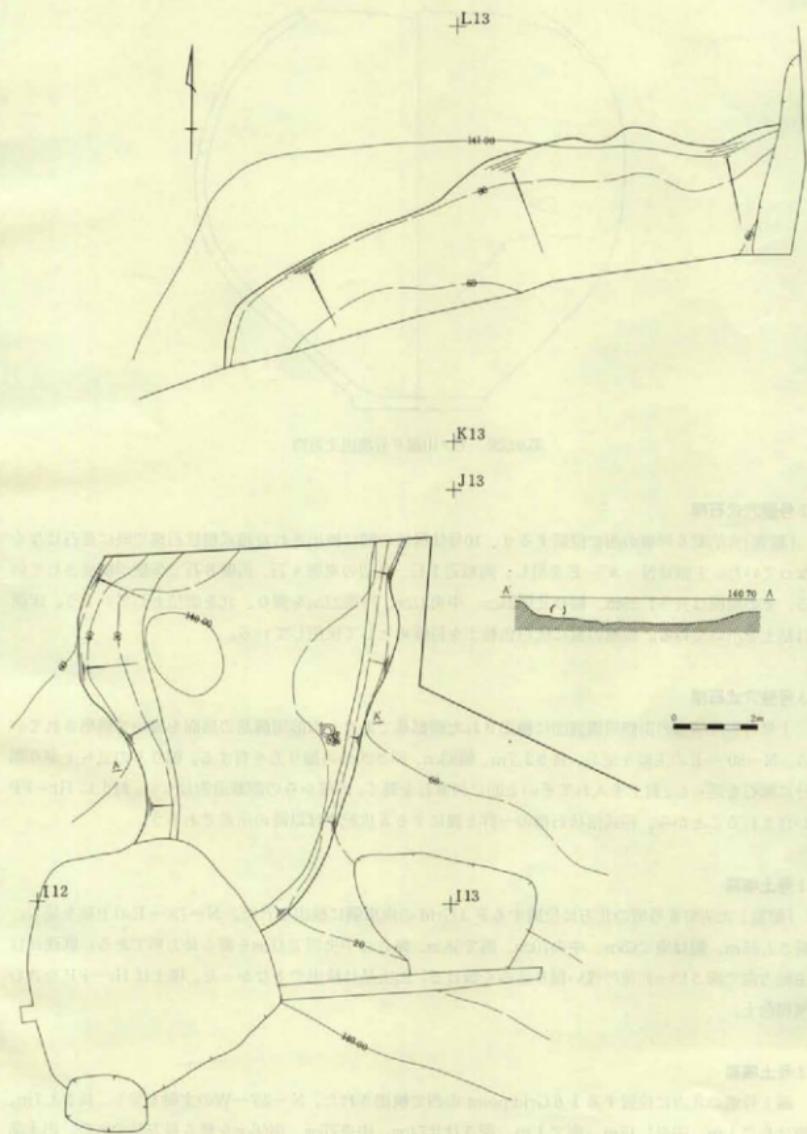
「綜覽」大胡町5号墳の下段葺石部の南で検出された箱式棺状石槨であり、5号墳構築後の所産である。石槨はN—71°—Wの主軸を呈し、長さ1.36m、最大幅87cm、深さ20cmで南辺がやや弧を描く方形の掘り方に板状の割れ石と河原石を使用して構築されている。

側壁は両短辺1石、長辺の北壁4石、南壁5石で構成する。その規模は、長さ83cm、幅は東壁26cm、中央26cm、西壁21cmを測り、東を頭位としているのであろう。

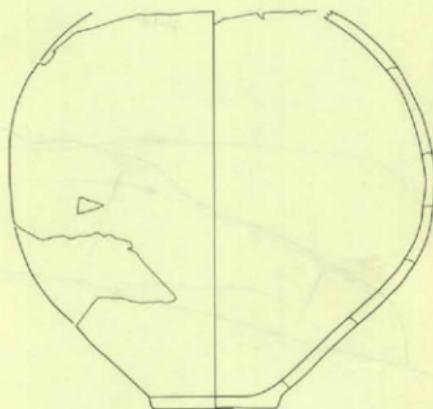
床面は6石で構成している。掘り方と側壁の間は暗灰白色粘土を含む暗褐色と河原石を詰めている。蓋石は7石で構成され、北壁部分の隙間に数個の河原石と暗灰白色粘土で目縫めを施して密閉している。副葬遺物は検出できなかった。規模からして小児の埋葬墓であろう。



第303図 上ノ山漏 5号墳



第304図 上ノ山塚6号墳



第305図 上ノ山洞 6号墳出土遺物

2号竪穴式石槨

「総覧」大胡町6号墳の西に位置する9、10号住居址の間に検出された箱式棺状石槨で既に蓋石はなくなっていた。主軸はN-8°-Eを呈し、両短辺1石、長辺の東壁4石、西壁6石で側壁が構成されている。その規模は長さ1.25m、幅は北壁24cm、中央22cm、南壁22cmを測り、北を頭位としている。床面は粘土を用いている。側壁の裏に灰白色粘土を目縫めとして使用している。

3号竪穴式石槨

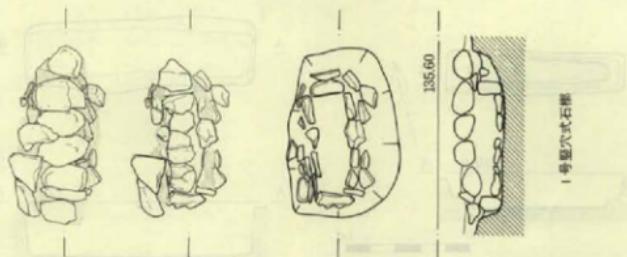
1号方形周溝墓の南側周溝底面に検出された砾槨墓であり、方形周溝墓の底面を貫いて構築されている。N-80°-Eの主軸を呈し、長さ2.7m、幅83cm、深さ20cmの掘り方を有する。掘り方の立ち上がり部分に線石を巡らし、封土を入れてその上面に河原石を葺く。内部からの副葬遺物はない。封土にHr-FPが含まれることから、箱式棺状石槨の一群と異なる6世紀半ば以降の所産であろう。

1号土塙墓

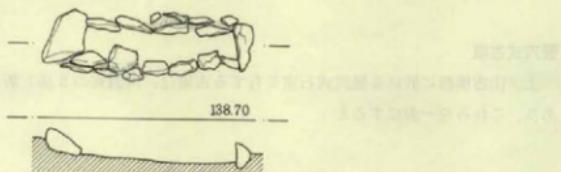
「総覧」大胡町6号墳の北方に位置するF 3 Gridの南東隅に検出された。N-75°-Eの主軸を呈し、長さ2.85m、幅は東で65cm、中央70cm、西で58cm、深さは中央部で47cmを測る長方形である。底面には主軸方向で深さ13cm前後の浅い掘り込みを設ける。出土品は検出できなかった。埋土はHr-FPを含む黒褐色土。

2号土塙墓

洞1号墳の北方に位置するI 6 Grid pointの西で検出された。N-25°-Wの主軸を呈し、長さ3.7m、幅は北で1m、中央1.15m、南で1m、深さは北74cm、中央77cm、南66cmを測る長方形である。出土品は検出されなかった。埋土は1号土塙墓と同様である。



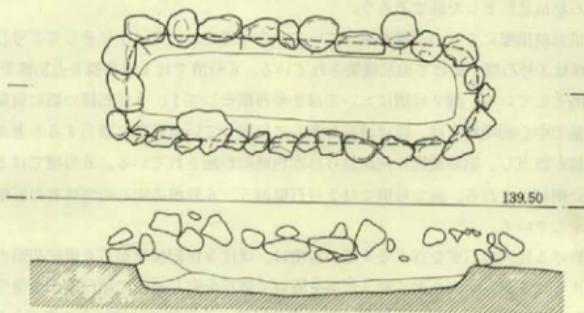
2号竖穴式石室



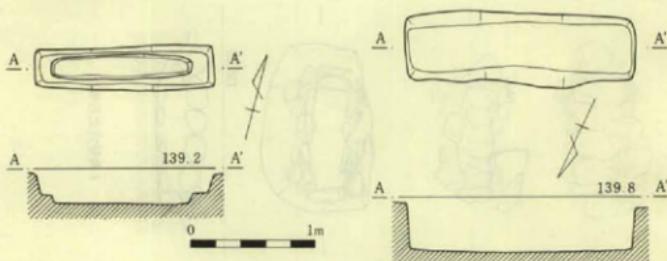
3号竖穴式石室



0 1m



第306図 1~3号竖穴式石室



第307図 1、2号土塚基

竪穴式古墳

上ノ山古墳群に於ける竪穴式石室を有する古墳は、再調査の3基と新たに確認された2基の計5基であり、これらを一表にすると

	長さ(m)	東幅(cm)	西幅(cm)	位置	主軸	墳丘径	副葬遺物	埴輪	備考
5号墳1号石櫛	1.97	40	31	南	N-86°-E	14.3~12.5	碧玉製管玉3個、鏡1 滑石製勾玉1個、土器片	有	2段構築の墳丘
2号石櫛	1.91	35	27	北	N-87°-E				
3号石櫛	1.94	43	33	中央	N-89°-E		劍1本、銅製小環1個		
6号墳1号石櫛	1.98	41	35	北	N-83°-E	17.8		有	
2号石櫛	1.88	32	31	中央	N-90°-E		刀1本、小刀。その他		
3号石櫛	1.75	35	29	南	N-90°-E		金屬片		
漏1号	1.93	52	33	中央	N-78°-E	14.5	鐵片	無	
漏2号1号石櫛				北	N-67°-E	13.6		無	
2号石櫛	1.86	46	45	西	N-13°-W				
3号石櫛	1.78	40	37	中央	N-75°-E				
漏3号	1.92	40	35	中央	N-68°-E	8.2	刀、鏡	無	

石櫛の長さの平均は、1.89m、東幅（漏2号墳2号石櫛の北幅を含む）40.4cm、西幅33.6cmであり、東幅が西幅より7cmほど広い。この結果は、各々の石櫛で頭部の方向に幅を広くとり、埋葬者の頭部を東（漏2号墳2号石櫛は北）とした証であろう。

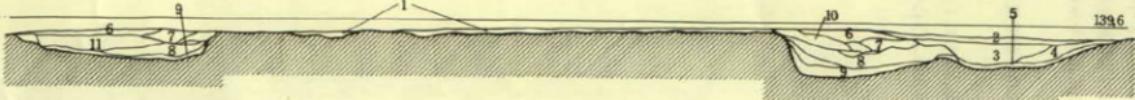
5、6、漏2号墳は墳頂部に3基の石櫛を設けている。5号墳においては1号そして3号石櫛の順で構築され、2号石櫛は3号石櫛を避けて追加構築されている。6号墳では1号石櫛を追加構築とし、2、3号石櫛をほぼ同時としている。漏2号墳においては2号石櫛そして1、3号石櫛の順に構築されたのである。この3基の中心的埋葬者は、ほぼ墳丘の中心に位置している石櫛に該当すると考えられる。5号墳では3号石櫛が該当し、副葬遺物に剣が見られ赤色塗彩が施されている。6号墳では2号石櫛が該当し、副葬遺物に剣が見られる。漏2号墳では2号石櫛が5、6号墳の中心的埋葬者の石櫛と主軸方向が一番近い値を示している。

上ノ山古墳群に於ける竪穴式石室を有する5基の古墳は、ほぼ5世紀後半から6世紀初頭の年代に構築されたものと考えられるが、明確を欠く漏3号墳を除いて墳丘を有し葺石で墳丘裾部を覆う共通点がある。しかし、5基の墳丘径が8.2~17.8mで最小径の漏3号墳と6号墳では倍以上の差がある。さらに1号墳多葬が見られる3基では、5、6号墳のように副葬遺物が出土するものと告無な漏2号墳（1号石

櫛は盗掘の為に明確でない)に分かれ、墳丘形態も5号墳のように2段構築と6号墳・漏2号墳のようにテラス状の空間地を有する違いが見られる。また、並列するこの3基はお互いにその聖域を意識しており周堀に萎縮部が見られる。このことは3基の古墳がほぼ同時平行で構築された可能性を示唆していると考えられる。

漏1号墳と漏3号墳は並列する3基の古墳を避けて位置している。漏1号墳は1墳1葬で最大の墳丘径を測り、漏3号墳は最小径にも拘わらず太刀と鉄鏹を副葬品としている。

さらに墳丘をもたない竪穴式石槨が5号墳の下段葺石部と9号、10号住居址の間、さらに1号方形周溝墓の周溝底に疊構墓があり、6号墳と漏1号墳の北方には土塙墓が存在する。以上のように小規模群集墳にも歴然とした階級差が生じていたのであろう。



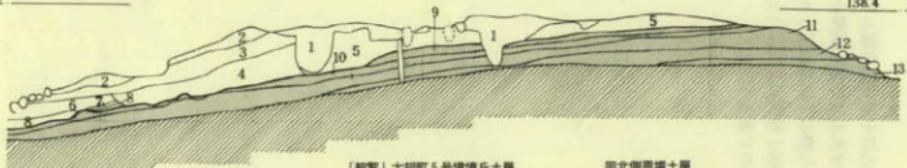
1号方形周溝墓土層

1. 黒褐色土で暗褐色土を含む
2. As-Cの純層
3. 黒色土で Hr-FP とローム粒を含む
4. 暗褐色土で Hr-FP とローム B を含む
5. 黑褐色土で少量のAs-Cとローム粒、ローム B、暗褐色土を含む
(2~5は1号墳周囲の土層)

6. 黑褐色土で Hr-FP、ローム粒、ローム B、暗褐色土を含む
7. 暗褐色土で少量のAs-C、黒褐色土、ローム粒を含む
8. 暗褐色土で As-C、黒褐色土、ローム粒を含む
9. 暗褐色土で黒褐色土とローム B を斑点状に含む
10. 暗褐色土で少量のカーボン粒と多量のローム粒を含む
11. 黑褐色土で As-C を含む

A

138.4 A'

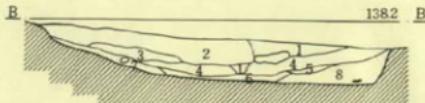


「鉢窓」大胡町5号墳埴丘土層

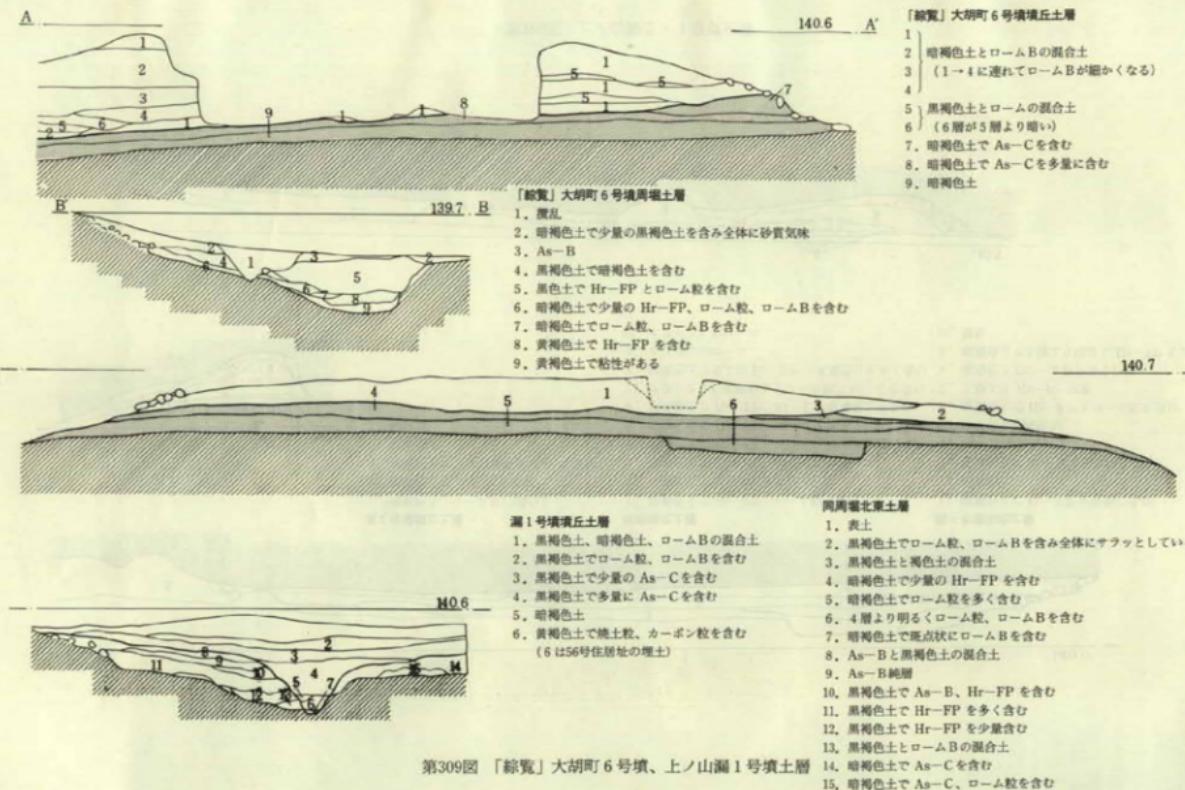
1. 黄褐色土で石楠構造の石材を含む
2. 黄褐色土でローム B を含む
3. 暗褐色土でローム B を含む
4. 3層に似るがやや明るい
5. 4層に似る
6. 暗褐色土で As-C を含む
7. 暗褐色土で As-C を含む
8. 黑褐色土で鐵土粒、As-C を含む
9. 暗褐色土で As-C を多量に含む
10. As-C 基礎層
11. 暗褐色土で As-C を含む
12. ローム漸移層
13. ローム

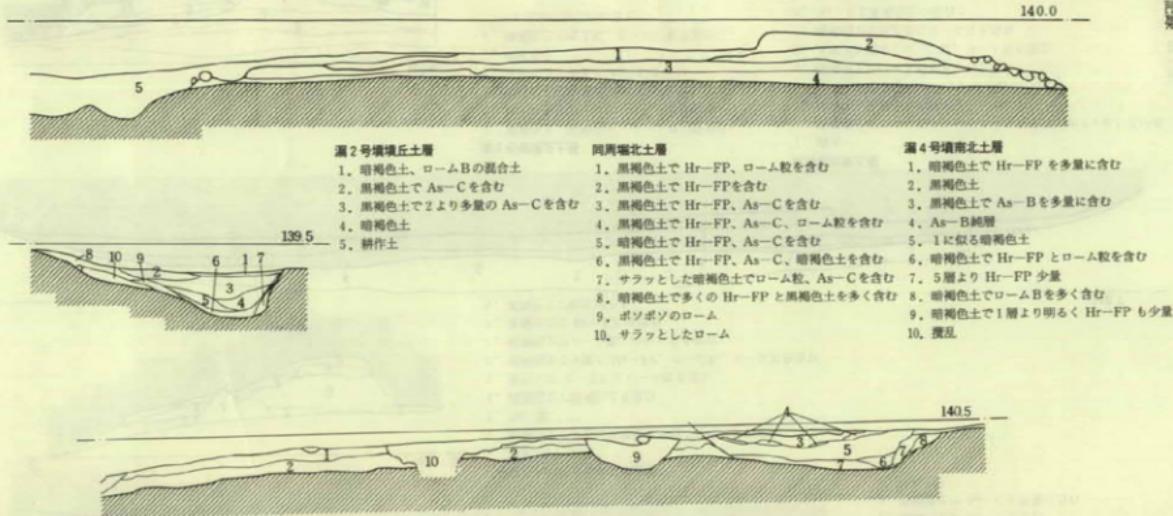
同北側周塙土層

1. 掘乱
2. 暗褐色土で全体に砂質気味
3. As-B の二次堆積
4. 黑褐色土で Hr-FP とローム粒を含む
5. 黑褐色土で Hr-FP、As-C、ローム粒を含む
6. 暗褐色土で Hr-FP を含む
7. 暗褐色土で As-C を含む
8. 暗褐色土で As-C、少量のカーボン粒を含む



第308図 1号方形周溝墓・「鉢窓」大胡町5号墳土層





第310図 上ノ山湖2・4号墳土層

第5節 中近世の遺構と遺物

当遺跡で中近世に該当する遺構は、竪穴住居址（1号住居址）・掘立柱建物址（1～3号）・溝状遺構（1M～11M）・地下式土坑などが検出された。

竪穴住居址

1号住居址（第312図）

G 6、7 Grid にまたがって検出され、漏 1号墳の東方の周堀を切って構築されている。全体の規模等は、東方部が削平されている為に明確でない。構造は、南方部に副屋的な存在である広がりと東西に長軸を有する長方形の主屋的な広がりがある。副屋的な広がりは、西辺と南辺の一部が確認できるのみで形状、規模は明確でない。床面は、ローム面で締まりは弱いがほぼ平坦である。主屋的な床面とは11～16cmの段差を生じて高い。柱穴状の掘り込みは、3カ所に検出されたが規則性は不明である。主屋の掘り込みは、P₁とP₅を東方の梁行辺と考えた場合、上面の規模は長軸（桁行方向）6.6m、短軸（梁行方向）4.3m前後を測る。掘り込みは、北壁で60～70cm、西壁で50～70cmを測る。床面は柱穴部を除き堅く締まった平坦なローム面である。柱穴は、壁の立ち上がり部に規則性をもって穿たれている。棟方向は東西で方位N-68°-Eを呈する。柱穴は桁行3間、梁行2間？を呈する構造の建物が推察される。面積は柱間から計算すると18.81m²を測る。柱穴は円形か楕円形で柱痕は不明。桁行の北辺はP₁-P₃-P₅、南辺はP₉-P₁₁-P₁₃の間に浅い柱穴を挟んでいる。梁行の西辺のP₁₄はP₁-P₁₃の中央よりやや南に位置する。遺物は埋土中からの出土で床面より雁首が出土したが不手際で紛失してしまった。

1号住居址出土遺物（第313図）

1は口径9.4cm、器高6.2cm、底径4.2cmを測る肥前系染付碗で器面に山水を描く。2も肥前系染付皿で復元口径12.5cm、器高3.2cm、底径7.1cmをはかる。3も肥前系染付碗の口縁部片で、器面にコンニャク判による装飾を施している。4の摺鉢片は14条を1単位とする節目を施している。

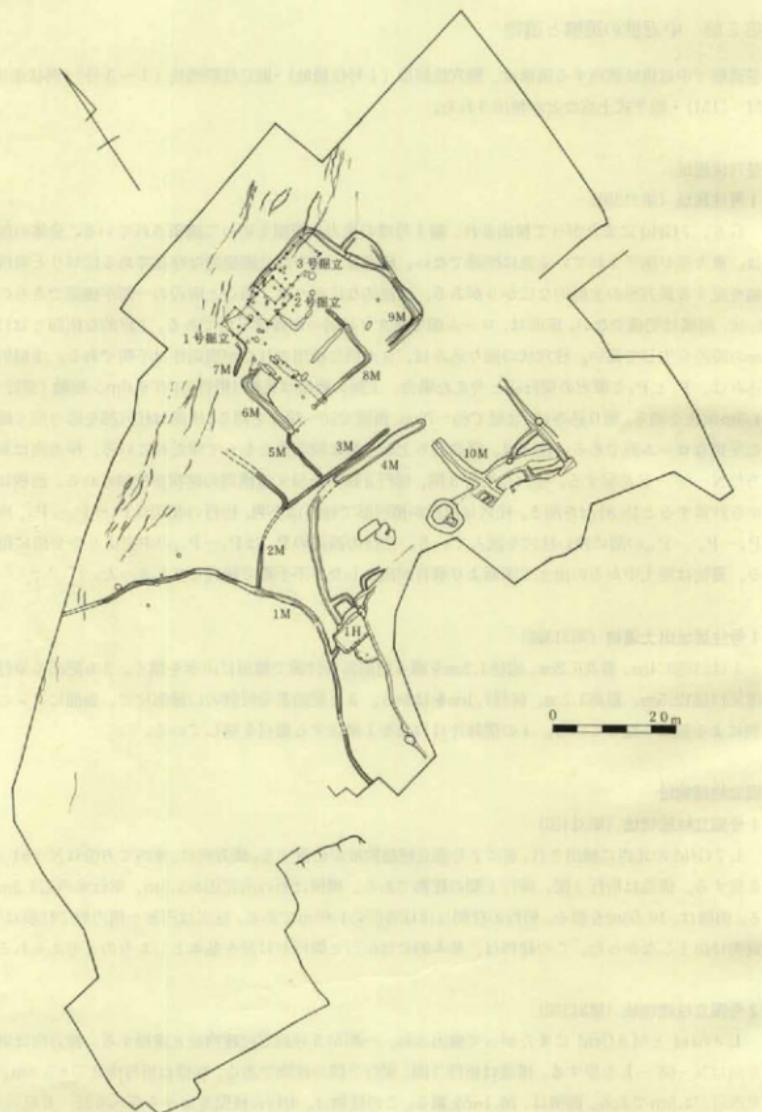
掘立柱建物址

1号掘立柱建物址（第314図）

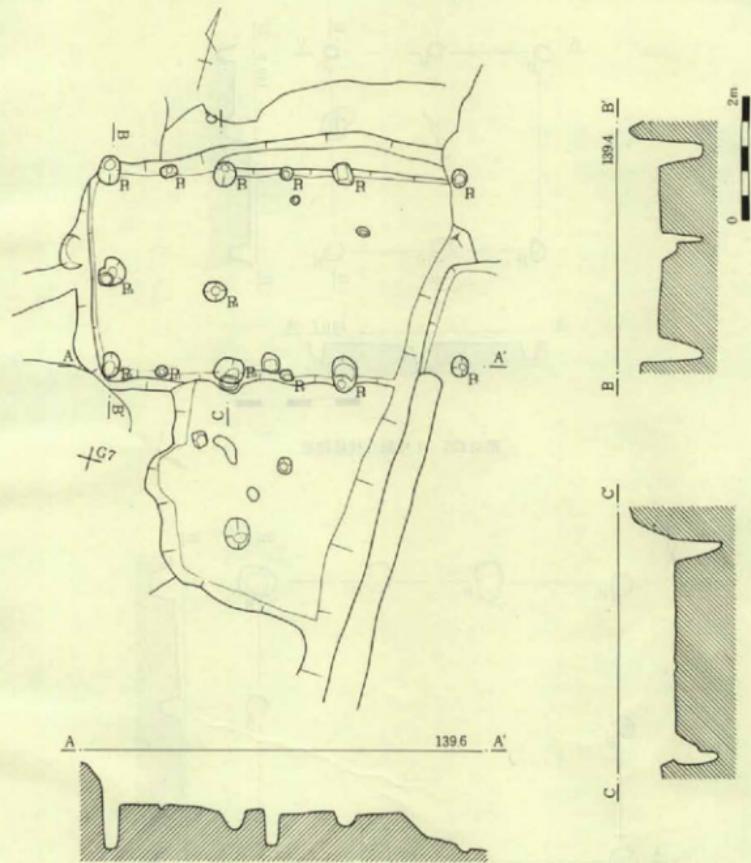
L 7 Grid の北西に検出され、東に2号掘立柱建物址が位置する。棟方向は、東西で方位はN-64°-Eを呈する。構造は桁行2間、梁行1間の建物である。規模は桁行南北辺が3.3m、梁行東西辺3.2mである。面積は、10.56m²を測る。桁行の柱間はほぼ等間の1.65mである。柱穴は円形か楕円形で柱痕は不明。遺物は出土しなかった。この建物は、基本的には桁行と梁行が11尺を基本としたものと考えられる。

2号掘立柱建物址（第315図）

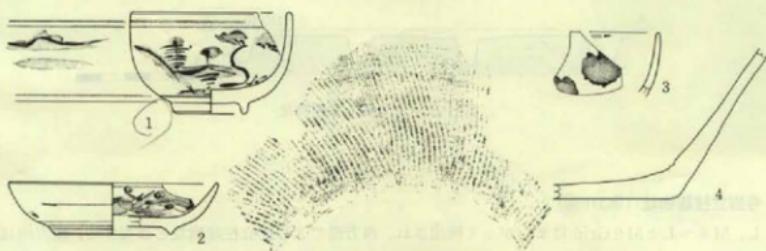
L 8 Grid とM 8 Grid にまたがって検出され、一部が3号掘立柱建物址と重複する。棟方向は東西で方位はN-68°-Eを呈する。構造は桁行3間、梁行2間の建物である。規模は桁行南北辺が5.8m、梁行東西辺が4.5mである。面積は、26.1m²を測る。この建物は、桁行の柱間を東から西へ6尺-6尺-7尺、梁行の柱間は東辺が南から北へ8尺-7尺、西辺が7尺-8尺を基本設計としていることが考えられる。柱穴は円形か楕円形で柱痕は不明。遺物は出土しなかった。



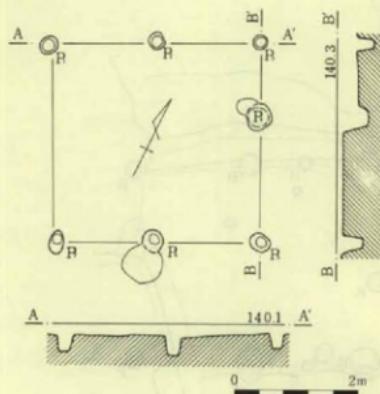
第311図 中近世の遺構分布図



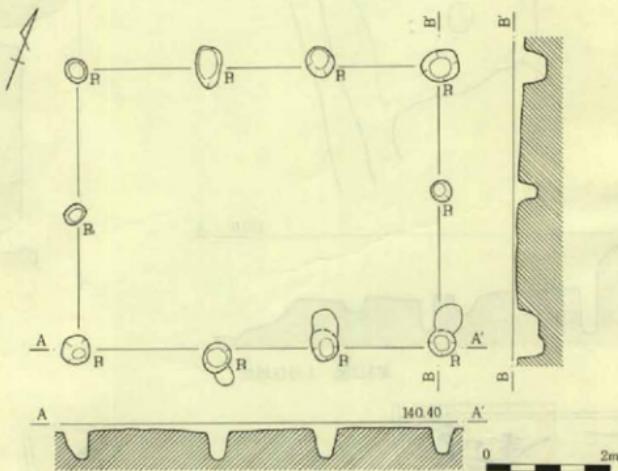
第312図 1号住居址



第313図 1号住居址出土遺物



第314図 1号掘立柱建物址



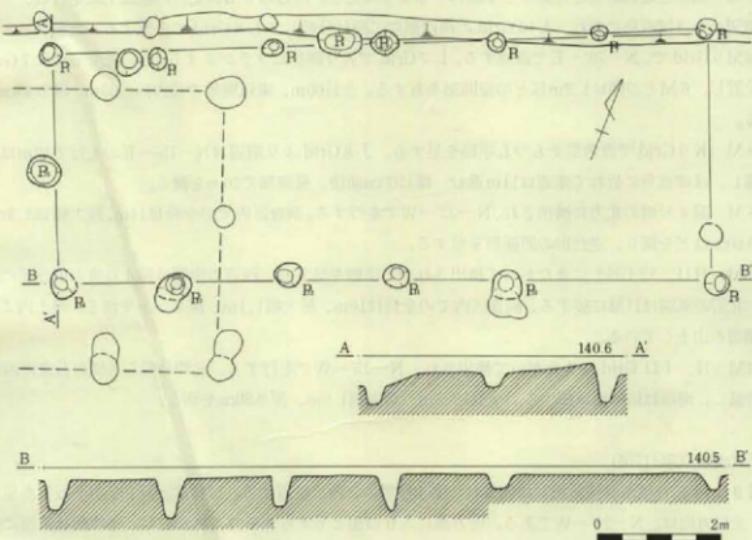
第315図 2号掘立柱建物址

3号掘立柱建物址（第316図）

L、M 8～LとM 9 Grid にまたがって検出され、西方部で2号掘立柱建物址と重複する。棟方向は東西で方向はN-68°-Eを呈する。構造は桁行の南辺5間、北辺6間、梁行の東西辺1間の建物が考えら

れる。規模は桁行の南北辺が10.8m、梁行3.9mである。面積は、42.12m²を測る。

この建物は、桁行の柱間を南辺で東から西へ12尺—6尺—6尺—6尺—6尺、北辺を6尺の等間隔、梁行の東西13尺を基本としていたことが考えられる。桁行の12尺間は、入り口部を推測する。柱穴はほぼ円形を呈し、柱痕は不明。遺物は出土しなかった。



第316図 3号掘立柱建物址

溝状遺構

1 M 調査区の最も西に位置し、台地を横断する状況で検出された。南方より漏2号墳～5号住居址～漏1号墳～53号住居址～26号住居址～22号住居址を切って弧状に走向する。残存の良い漏1号墳で幅1.3m、深さ85cm、全長72cmを測る。断面形は薬研状を呈する。

2 M H 6 Grid で1Mと接し、I 7 Grid で3Mと接して北進する。南辺がややカーブを呈して50号住居址を切っている。東辺はN-25°-Wで走行して37号住居址に向かう。65cm前後の幅で、最深部が22cmを測る。

3 M I 6 Grid に検出された50号住居址の東で、2Mに接する。走行は、N-78°-Eを呈する。全長21m、平均幅50cm、深さ20cmを測る。

4 M 1号住居址の西で1Mに接し、53号住居址～52号住居址～2号方形周溝墓～51号住居址～3号住居址を切って東進する。1号住居址の北方ではL字状に枝溝が走る。西辺は1Mと接する付近でL字形を呈して緩やかなカーブで北進し、I 8 Grid で3Mとほぼ併走する。全長45m、最大幅1.5m、最深部30cmを測る。

5M I 7 Grid で南端部が3Mと隣接し、北方部が6Mと接する。その主体は、N-20°-Wの走行で北方部が6M付近で北東方向に折れる。全長10m、幅50cm、深さ20cmを測る。

6M J、K 7 Grid にまたがって検出された。南端部が5Mと接し、N-19°-Wで11.8mほど直進してほぼ直角に折れて4mほど東進する。最大幅1.55m、最深部35cmを測る。

7M 掘立柱建物群を北方部として囲郭するように巡る。南辺は8Mの走行の延長上に走行し、東辺は南辺からほぼ直角に折れ、L 10 Grid の南西部で二股に分岐してL 9 Grid で合流する。北東コーナー部はM 9 Grid で、N-70°-Eで直進する。L 7 Grid で入り隅状にクランクする。その先端部はK 7 Grid に位置し、6Mとの間に1.2mほどの空間部を有する。全長60m、東辺南部で最大幅2.05m、深さ45cmを測る。

8M K 9 Grid で直角部をもつL字形を呈する。J 8 Grid より南辺はN-75°-Eの走行で12mほど直進し、ほぼ直角に折れて東辺は11m進む。幅は60cm前後、最深部で20cmを測る。

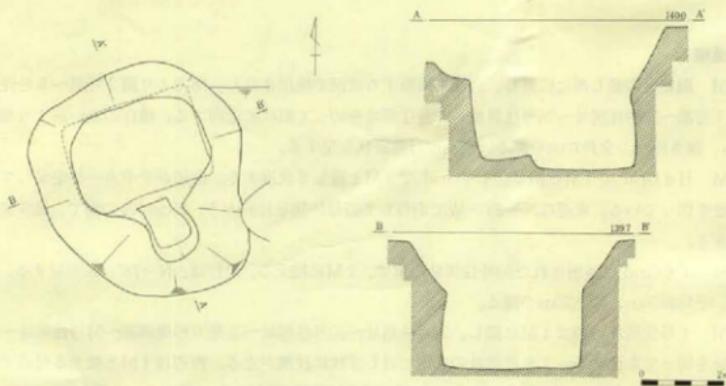
9M 漏4号墳の北方に検出され、N-23°-Wで走行する。調査区内での全長は14m、最大幅は2.5m、深さ60cmほどを測り、逆台形の断面形を呈する。

10M H11、12 Grid にまたがって検出され、L字形を呈する。西辺の南端は漏4号墳の墳丘部に達し、北辺の東端は11Mに接する。調査区内での全長は10m、最大幅1.1m、深さ20cmを測る。埋土内より尖頭器が出土している。

11M H、I 11 Grid にまたがって検出され、N-15°-Wで走行する。北端は漏5号墳の石室南西部で消滅し、南端は削平部に接する。全長19.5m、最大幅1.6m、深さ30cmを測る。

地下式土坑（第317図）

H 9 Grid の台地南側傾斜地に検出され、漏4号墳の北西に位置する。形状は、偏平な羽子板状を呈する。主軸方向は、N-21°-Wである。南方部に入り口部と考えられる立て坑を有し、主体部は東西に長い長方形を呈する。入り口部は、確認面より2.3mの深さで底面に達する。底面は、南方から主体部に緩



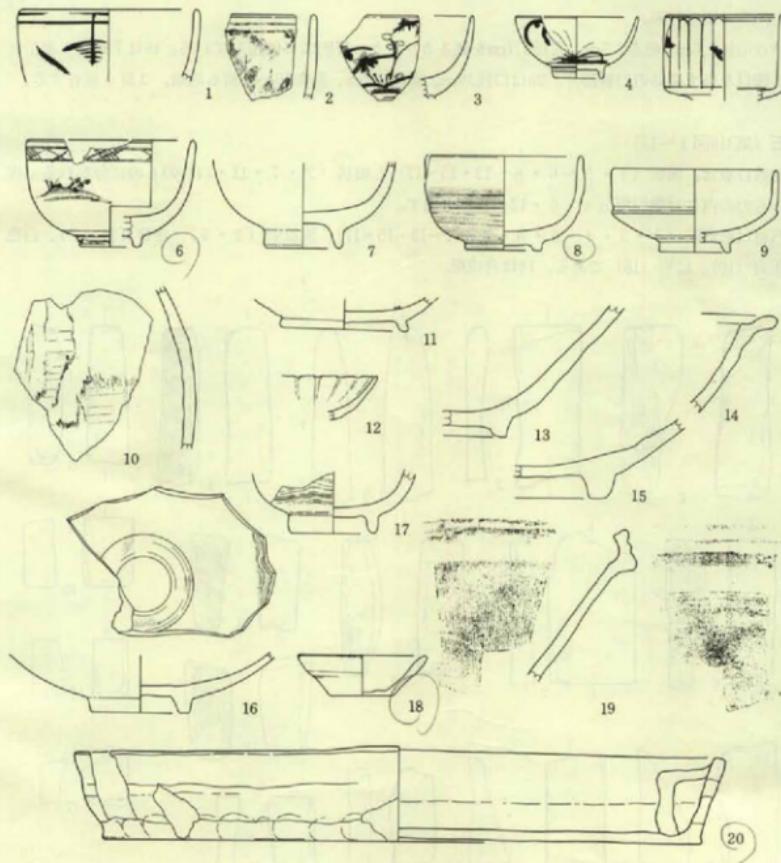
第317図 地下式土坑

やかに高まる。規模は、長さ1.1m、最大幅0.9mを測る。主体部とは30cmほどの段差を設けている。主体部の規模は、東西長3.2m、南北長2.25mで床面積7.2m²を測る。床面は平坦で、壁面はややカマボコ状の断面形を呈している。床面から天井部までは高さ2m前後と考えられる。埋土より石臼片が出土。

中近世出土遺物

陶磁器等（第318図1～20）

調査区で出土した陶磁器等は、漏1号墳の周堀と掘立柱建物址の周辺に集中して出土した。その大半



第318図 中近世出土遺物

は、肥前系と瀬戸美濃系の所産の物が大部分を占める。

1～6は肥前系の染付碗。1は復元口径10.6cmを測る。口唇部下に2本の圓線を巡らし、器面に山水を描く。2も1と同様に口唇部下に圓線を巡らし、山水を描いている。6は口径10cm、器高6.5cm、底径3.4cmを測る。口唇部下に格子文を挟む圓線と山水を描く。3と4は器面に草花文を描く。5は連子格子文に蝶を描く。

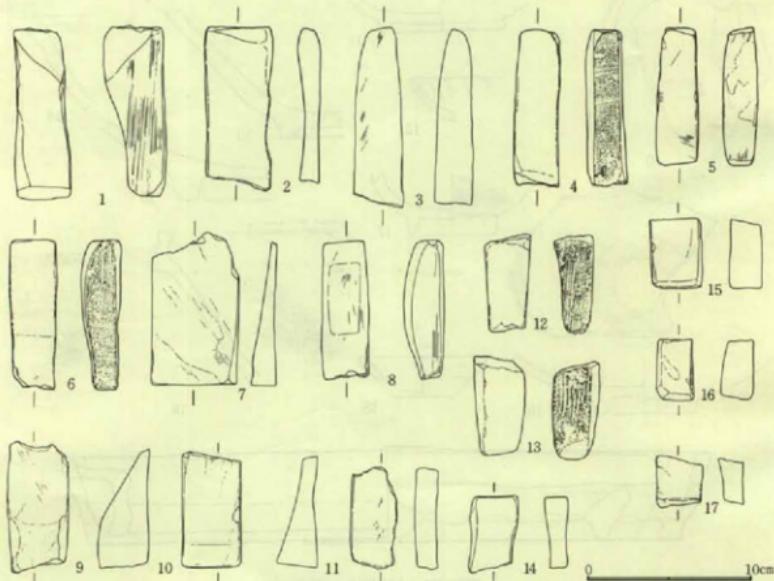
7～15は瀬戸美濃系の所産と考えられる。8は灰釉と鉄釉の塗り分け碗。9は灰釉の小鉢。10は尾呂徳利の胸部上半片。11は灰皿皿。12は菊皿の口縁部片。13、14は大鉢片で鉄釉で文様を描く。15は唐津三島手の大鉢片。16は唐津系の刷毛目皿と考えられ、見込に蛇ノ目釉ハギと砂目が見られる。17も唐津系の所産の刷毛目碗。

18は口径7.6cm、器高2.5cm、底径3.7cmを測るカワラケ。灯明皿に使用している。19は7条を1単位とする櫛目を施す摺鉢の口縁部片。20は口径39cm、器高5.7cm、底径36cmを測る炮焙。3耳を装着する。

砥石（第319図1～17）

総数17点は、楔状（1・3～6・8～13・15～17）と板状（2・7・11・14）のものに分かれる。楔状のもの内には鋸引痕（4・6・12・13）を残す。

石材は磁沢石（1・3・4・6・8・9・11～13・15・17）、流紋岩（2・5）、珪質頁岩（7）、白色凝灰岩（10）、砂岩（16）である。14は合成砥。



第319図 砥石

第IV章 調査の成果と今後の課題

上ノ山遺跡からは、先土器時代を初め縄文時代、古墳時代前期の住居跡、竪穴式古墳・横穴式古墳、中近世の遺構・遺物が検出された。先土器時代では、槍形尖頭器が1点出土したが時間等の制約からその追及には及ばなかった。しかし、対岸に位置する三ッ屋遺跡を含めた本遺跡周辺に先土器時代の遺跡群の存在を予想させる。縄文時代の遺物には、早期から後期の土器が出土したが、その主体は中期後半に属する加曾利E式のものである。県内の当該期遺跡としては、三原田遺跡(1)、大平台遺跡(2)、曲沢遺跡(3)、国分寺中間地城遺跡(4)、清里・長久保遺跡(5)、小町田遺跡(6)、荒砥前原遺跡・赤石城址(7)、荒砥二之堰遺跡(8)、行幸田遺跡(9)、清泉寺遺跡(10)等が知られている。既刊ずみの報告書では、土器の編年観が提示されているのでその概略を記す。

- (1) 「三原田遺跡」1990 群馬県企業局
- (2) 「大平台遺跡」1989 群馬県教育委員会・財團法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
- (3) 「曲沢遺跡発掘調査概要」1978 赤堀村教育委員会
- (4) 「国分寺中間地城遺跡」1986 群馬県教育委員会・財團法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
- (5) 「清里・長久保遺跡」1986 財團法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
- (6) 「小町田遺跡」1984 財團法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
- (7) 「荒砥前原遺跡・赤石城」1985 財團法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
- (8) 「荒砥二之堰遺跡」1985 財團法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
- (9) 「行幸田遺跡」1989 渋川市教育委員会
- (10) 「清泉寺遺跡」群馬県笠懸町教育委員会調査

小町田遺跡では、加曾利E2式を頸部に無文帯をもつことを基準とする。そして2時期に分かれる可能性を示唆している。E3式は頸部の無文帯が消失し、口縁部文様帯の簡略化の方向性と胴部の懸垂文間に磨消しが施される。さらに連弧文土器や曾利系の土器、器台形土器の一般化を基準としている。E4式は口縁部文様帯の消失と微隆帯や沈線による区画文を主体としている。

荒砥二之堰遺跡では、加曾利E3式をA、B類に分類している。口縁部文様帯の渦巻文・梢円区画文や胴部の磨消し繩文によって特徴づけ、口縁部文様帯の存在の有無で分類している。そしてA、B類の共伴関係からさらに分類の可能性をほのめかしている。E4式は断面三角形の微隆起帯による文様構成されることの多い土器としている。

国分寺中間地城遺跡の出土陶文中期土器について研究紀要(1)で桜岡氏が口縁部文様帯と胴部文様帯のあり方、及びその構成要素を基準としてI群～IX群に分類し、それらを1～7期に設定した。さらに画期をE1～E4式に対比させている。そしてE3式の初めを文様構成上3帯構成から2帯構成への変化として位置づけている。①研究紀要-4- 1987財團法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

清里・長久保遺跡では財團法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団の刊行研究紀要1982「縄文中期土器群の再編」に準拠して土器を分類している。(2)

御幸田遺跡では、編年試案による加曾利E式の混乱をさけ神奈川考古第10号 1980 神奈川考古同人会に準拠して編年を試みている。

E1式は横「S」・クランク文を口縁に持つキャリパー型の土器群は少量で、三原田タイプ(1)の土器と他地域との並行関係を指摘する資料が掲載されている。E2式は頸部に無文帯をもつもの、E3式は頸

第IV章 調査の結果と今後の課題

部文様帶の消失とし、古式と中式に分類している。E 4 式は口縁分類文様帶の消失と微隆起文及び細沈線文をもつ土器としている。

大平台遺跡では、加曾利 E 1 ? 式の段階は県内の明確なる資料の不足から御幸田遺跡・三原田遺跡等の分析に依存している。E 2 式は口縁部文様帶・頸部文様帶・胴部文様帶の三帯構成を基準とする。E 3 式は口縁部文様帶・胴部文様帶の二帯構成を特徴とし、胴部文様における無文部等から 4 段階を想定している。第 I 段階は E 2 式からの漸移的変化とし、胴部文様帶の沈線間を磨消し等によって無文部としない。第 II 段階は懸垂する平行沈線間を磨消して無文部とするが次段階と比較して狭いとしている。第 III 段階は胴部文様帶の無文部の幅が広く、充填繩文技法を特徴としている。第 IV 段階は胴部文様帶の無文部は第 III 段階と同様に充填繩文技法で表現される。口縁部文様帶は幅広の撫で状の沈線で区画される。さらに口縁部文様帶を持たない土器の共伴を指摘している。E 4 式は口縁部文様帶を持たないことを特徴とし、細く鋭い沈線または微隆帶による施文の一群を位置づけている。

このように各遺跡ごとの編年観の基準は様々であるが、当遺跡では上記の資料を参照して加曾利 E 式の土器を I ~ VI 期に分類して見たい。

加曾利 E 式土器の変遷

I 期 御幸田遺跡の E 1 式に準拠。

II 期 加曾利 E 2 式

口縁部文様帶・頸部文様帶・胴部文様帶の三帯構成を基準とし、頸部に無文帶をもつ。

III 期 加曾利 E 3 古式

口縁部文様帶・胴部文様帶の二帯構成で頸部文様帶の喪失、胴部の懸垂文間に磨り消しが採用されていない。

IV 期 加曾利 E 3 中式

胴部の懸垂文間に幅狭い磨り消しを施す

V 期 加曾利 E 3 新式

IV 期の口縁部の渦巻文の簡略化と III 期より胴部文様帶の無文部の幅が広い

VI 期 加曾利 E 4 式

口縁部文様帶の喪失、微隆起文及び細沈線文による施文

この分類によって各住居址を概観してみたい。

9号住居址（第 6 図）

本住居址は、石囲い炉に伴う埋設土器と埋土から数点の土器が出土したのみであった。埋設土器は、口縁部文様帶・頸部文様帶・胴部文様帶から構成され、頸部文様帶に波状文を施していることより II 期の新しい段階と考えられる。

10号住居址（第 7、8 図）

本住居址は、形状は円形で 5 ~ 6 本の主柱穴が想定される。炉址は、埋設土器を伴うコの字状石囲い炉で南方が開口し部分的に炉内に石敷を施している。覆土中より II 期の特徴としている頸部を無文帶とする資料の出土と埋設土器より II 期の段階が考えられる。

11号住居址（第 10 ~ 13 図）

本住居址は、南方部が開口する石囲い炉を有する。出土した資料は、III ~ IV 期の土器片が混在してい

る。頸部無文帶の口縁部片(2、30、31)、24の大型突起片はII期に該当する。1は隆帶により口縁部と胴部文様帶を区画し、胴部には懸垂文を垂下させる。5は連弧文系、6は曾利系の所産と考えられる。33は磨消し懸垂帶が垂下し、45は微隆帶による区画文をほどこしている。土器から明確な段階を推察されないが、炉址の形態は12号住居址に類似することからII～III期の段階が考えられる。

12号住居址（第15図）

本住居址は、南方部が開口する石窓い炉を有する。出土した資料は、頸部無文帶の口縁部片と沈線による懸垂文を垂下させる胴部片が大半を占める。3は算盤玉状の胴部を呈する浅鉢片。これらからII期の段階が考えられる。

13号住居址（第17、18図）

本住居址は、南方部が開口する石窓い炉で埋設土器を伴う。埋設土器は頸部文様帶が喪失し、口縁部文様帶から沈線による懸垂文と波状懸垂文を垂下させていることからIII期の段階が考えられる。

14号住居址（第17、18図）

本住居址は、13号住居址と重複する。炉址は縁石を伴う埋甕炉である。埋甕炉の炉体土器は頸部と胴部文様帶を喪失する。III期の段階に位置付けられようか。

15号住居址（第20図）

本住居址は、当遺跡で検出された1軒の敷石住居址である。出土した資料1、4、5から口縁部文様帶の喪失、微隆帶により文様を意匠する。このことからVI期の段階が考えられる。

16号住居址（第22図）

本住居址は、15号住居址下に検出された。方形の石窓い炉を有する。出土した資料はII～IX期と曾利系に比定される土器片が混在して見られる。1は口縁部文様帶を隆帶により楕円区画文に入り組状に配し、頸部は無文とする。2は台形を呈する器台形土器。3～5はII期に比定されよう。8は曾利系の土器片。11は微隆帶による区画を施している。これらから15号住居址以前の段階が考えられる。

17号住居址（第24図）

本住居址は、北西部を風倒木跡により破壊されている。炉址の一部にも影響が見られる。出土した資料には、II期を主体とする土器片が多く見られる。1は連弧文系、2は隆帶による懸垂文を垂下させII期の段階に該当しよう。17はIV期の要素が見られる。全体的にはII～III期を中心とする段階が考えられる。

18号住居址（第26図）

本住居址は、南方部を開口する石窓い炉と推察され埋設土器を伴う。出土土器は、I～II期の資料が見られる。1は炉内の埋設土器で沈線による懸垂文と波状懸垂文を垂下させている。2はキャリバー形を呈する無文の口縁部で、頸部には沈線を伴う隆帶で胴部文様帶を区画している。II期に該当しよう。4はI期に比定され、渋川市御幸田遺跡B D121の出土の大型の深鉢に類似し、三原田式に該当する。5は頸部無文帶が見られる。このことからI～II期の段階が考えられる。

19号住居址（第28、29図）

本住居址は、集石炉を伴う。出土土器は、II～IV期に該当する。4は頸部に繩文を施し、5は胴部に沈線による雜な波状文を施している。胴部に垂下する懸垂文は29を除き磨消しを伴わない。これらからII～III期の段階が考えられる。

20号住居址（第31図）

第IV章 調査の結果と今後の課題

本住居址は、集石炉を有する。出土資料1は頸部を無文帶とし、胴部文様帶を隆帶で懸垂文と波状懸垂文を垂下させ、II期に該当する。2は頸部文様帶を喪失し、III期の要素が見られる。5の胴部文様帶は沈線により雜ではあるが58号住居址3に似る文様を施している。これらからII～III期の段階が考えられる。

21号住居址（第33図）

本住居址は、20号住居址と重複する。炉址は明確ではないが方形の石囲い炉と思われる。出土資料の7は頸部を無文帶とするII期の口縁部片である。隆帶による懸垂文を垂下させる胴部片には11、14が見られる。1は4単位の緩やかな波状口縁を呈し、沈線により口縁部と胴部文様帶を区画する。これらからII～III期の段階を推察する。

22号住居址（第35、36図）

本住居址は、埋設土器を伴う石囲い炉を有する。出土資料4は炉内の埋設土器で連弧文系土器に該当する。24は埋甕で磨消しを伴う沈線区画を胴部に垂下させている。1はジョッキ形土器で先端部を獣手状とする懸垂文が垂下する。これらからIV期前後の段階が考えられる。

23号住居址（第38図）

本住居址で検出された資料は、沈線区画による磨消し帯と繩文帯を交互に垂下される胴部片からV期頃の段階が考えられる。

24号住居址（第40図）

本住居址は、縁石を伴う埋甕炉を有する。埋土中からの出土遺物はV～VI期に該当する。1の埋甕炉の炉体土器はV期に該当し、渦巻文と楕円区画文を入り組状に配し、胴部は磨消し帯と繩文帯を交互に垂下させる。

25号住居址（第42図）

本住居址は、方形の石囲い炉を有する。出土した資料はその大半がIV期の段階と考えられる。1は頸部に無文帶を呈するが、胴部文様帶に磨消し懸垂帯を垂下させる。他の胴部片の多くも同様に磨消し懸垂帯を垂下させている。

26号住居址（第44、45図）

本住居址は、南方部が開口する石囲い炉を有する。出土した資料はII期に該当すると考えられる。頸部に無文帶を有する口縁部片（1、5その他）、大型の山形突起を付す口縁部片（2、11）、隆帶による懸垂文を施す胴部片はII期に該当する。20は曾利系の所産であろう。16～19、21、22はII期と考えられる。

27号住居址（第47、48図）

本住居址は、埋設土器を伴う方形の石囲い炉を有する。出土した資料1は隆帶による区画文と懸垂文を施し沈線で区画文内等を充填している。2と9は胴部文様帶の懸垂文間を沈線で充填するが2は沈線、9は隆帶による懸垂文である。この3点は曾利系の所産と考えられる。8、14はIV～V期に該当されよう。

28号住居址（第51、52図）

本住居址は、埋設土器を伴う石囲い炉を有する。出土した資料は、II～VI期に該当しよう。3は炉内の埋設土器で連弧文系土器と考えられる。1は胴部文様帶に垂下する磨消し懸垂帯を施し、2はJ字状区画文を配している。29号住居址の遺物の可能性が大である。

29号住居址（第53、54図）

本住居址は、方形の石囲い炉を有する。出土した資料1は口縁部文様帯を喪失し、沈線区画による意匠文を配し内部に磨消しを施す。6の双耳壺は炉址の東方に検出された土坑内の出土である。埋土中からは、III期の要素を含む土器片も見られるが可能性としては、V～VI期の段階が考えられる。

30号住居址（第58～60図）

本住居址は、重複する住居か建て替えか明瞭ではない。さらに31号住居址と切り合っている。出土した資料3は1号炉の埋設土器で沈線による懸垂文を垂下させる。2、4は2号炉の埋設土器で2は口縁部文様帯を隆帶により意匠し、胸部文様帯は沈線区画による懸垂文を垂下させ、区画内に磨消しを施している。4は口縁部文様帯に渦巻文と梢円区画文を配し、胸部には沈線による懸垂文を垂下させる。7は頸部に無文帯をほどこしている。これらから不確定であるがIII～IV期の段階が考えられる。

31号住居址（第61、62図）

本住居址の出土した資料は、V～VI期に該当しよう。資料1は4単位の山形突起を付し、口縁部文様帯は簡略化した渦巻文と梢円区画文を入り組状に配している。胸部文様帯は沈線区画によるやや幅広の磨消し帯と繩文帯を交互に垂下させている。5～8は沈線によるアーチ状文が配されている。9は連弧文系土器である。1の資料からV期が考えられる。

32号住居址（第65、66図）

本住居址は、埋設土器を伴う石囲い炉を有する。出土した資料の5は炉内の埋設土器で口縁部文様帯に渦巻文と梢円区画文を配し、その下方から沈線により懸垂文を垂下させる。7は沈線による懸垂文を垂下させる。8は横位沈線により口縁部文様帯と胸部文様帯を区画し、胸部には懸垂文を垂下させる。9は台形の器台土器の完形である。埋土中の土器片にはII～IV期の要素が見られるが、5の資料からはIII期の段階が考えられる。

33号住居址（第67図）

本住居址は、32号住居址と切り合う。出土した資料はII～VI期と考えられる。1は口唇部に無文部を設け、沈線による波状区画文を配し区画内に磨消しを施す。2は口唇部にやや幅広の無文帯を設け隆帶区画により磨消し帯と繩文帯を垂下させる。胸部片は沈線か隆帶区画による磨消し帯と繩文帯を垂下させている。

34号住居址（第69、70図）

本住居址は、埋甕炉を伴う石囲い炉を有する。出土した資料3は炉内の埋設土器で口唇部下に交叉刺突文を巡らし、口縁部には横位に波状文を配している。頸部には隆帶による波状文を巡らし、下方には懸垂文が垂下するのであろう。1は倒置土器で2～4が入れ子状に1の上面内部に出土。1は隆帶により渦巻文を横位につなぐ唐草文系の一群に比定される。24は沈線区画による磨消し懸垂帯と波状懸垂文を垂下させ、IV期に該当しよう。2は床面密着の出土で、口縁部文様帯に渦巻文と梢円区画文を連結して配す。頸部文様帯は沈線による波状文を意匠し、胸部文様帯を横位沈線で区画する。II期に該当する。5は埋甕で口唇部下に横位沈線を巡らし口縁部には波状文を横位に連続させる。6も床面密着の倒置土器で、4単位の山形突起をふす。口縁部文様帯は渦巻文と梢円区画文を入り組状に配し、胸部には沈線区画の磨消し懸垂帯を垂下させる。IV期に該当しよう。4は曾利系の一群と考えられ、隆帶により口縁部に波状文を巡らす。その下方はH字状区画文を配し、区画内を沈線で矢羽状に充填する。これらからIII期前後の段階が考えられる。

35号住居址（第72図）

本住居址は、方形の石囲い炉を有すると考えられる。出土した資料はIV期の段階以降に位置すると考えられる。1、2はなぞりの沈線で口縁部文様帯に梢円区画文を配し、胴部文様帯は磨消し懸垂帯と縄文帯を垂下させる。7は微隆帯による区画文を配す。

36号住居址（第74図）

本住居址は、埋設土器を伴う石囲い炉を有する。出土した資料3は炉内の埋設土器で、4単位の山形突起を付し口縁部文様帯に渦巻文と梢円区画文を入り組状に配す。胴部文様帯は沈線区画による磨消し懸垂帯と縄文帯を交互に垂下させる。1も4単位の山形突起を付し、口唇部下に2段の連続刺突文を施す。胴部文様帯は沈線区画による磨消し懸垂帯と縄文帯を交互に垂下せる。これらからIV期以降の段階が考えられる。

37号住居址（第76、77図）

本住居址は、地床炉を有する。出土した資料1の浅鉢形土器は、頸部文様帯を渦巻文と梢円区画文を先端部を渦巻状とするS字状突起間に配す。2は曾利系の一群と考えられる。5の浅鉢形の胴部文様は隆帯による渦巻文を施している。口縁部片と胴部片はIII～V期の段階が考えられる。

38号住居址（第80、81図）

本住居址は、39号住居址と切り合いの関係で石囲い炉を有する。出土した資料1は炉内の埋設土器で4単位の山形突起を付し、口縁部文様帯は渦巻文と梢円区画文を連結して配している。胴部文様帯は沈線区画による磨消し懸垂帯と縄文帯を交互に垂下せる。V期の段階が考えられる。2の埋甕は口縁部を欠くが胴部文様帯を沈線区画による磨消し懸垂帯と縄文帯を交互に垂下させている。1と同様にV期の段階に該当しよう。3の埋甕も口縁部文様帯と胴部文様帯よりV期の段階が考えられる。4の資料は微隆起帯による渦巻文等を意匠する。これらからV期頃の段階が考えられる。

39号住居址（第80、81図）

本住居址は、38号住居址によって切られていると考えられる。出土した資料は3点の埋甕土器がある。13と15は胴部文様帯が同様の構成をとり、V期に該当する。14は簡略した渦巻文と梢円区画文を口縁部に配し、胴部文様帯は沈線区画による磨消し懸垂帯と縄文帯を垂下させている。これらからV期の段階が考えられる。

40号住居址（第83図）

本住居址は、地床炉を有する。出土した資料からはIV～V期の段階が考えられる。4は口縁部文様帯と胴部文様帯の明確な境界は曖昧で胴部には磨消し懸垂帯を垂下させている。

41号住居址（第85図）

本住居址は、埋設土器を伴う石囲い炉と縁石を伴う埋甕炉を有することから重複か建て替えが考えられる。出土した資料1は石囲い炉に伴う埋設土器で、口縁部文様帯と胴部文様帯の在り方からV期の段階が考えられる。10は縁石を伴う埋甕炉の土器で、連弧文土器の一群と考えられる。15は沈線区画による幅の狭い磨消し懸垂帯と波状懸垂文を垂下させていることから、IV期頃の段階が考えられる。

42号住居址（第87図）

本住居址は、方形の石囲い炉を有する。出土資料のなかに連弧文系土器が2点（1、10）が見られる。胴部片の資料中には磨消し懸垂帯を施すもの、沈線による懸垂文を垂下させるものもある。このことからIII～IV期の段階が考えられよう。

43号住居址（第89図）

本住居址は、埋甕炉を有する。出土資料はわずかであるが、1の炉体の埋甕は条線文で胴部を充填する。2、3は磨消しを伴うことからV期頃の段階が考えられる。

44号住居址（第91、92図）

本住居址は、円形気味の石囲い炉を有する。出土した資料の1は、口縁部を無文帯とし胴部文様帯は隆帯による棹状文を配す。棹状文内は縄文帯と無文帯を交互に施し、VI期に該当しよう。2は頸部を無文帯とし、胴部文様帯は沈線により横位の区画文と懸垂文を施し、II期に該当しよう。3と5は沈線区画による磨消し懸垂帯と縄文帯を垂下させている。2のようにII期に該当されるものからVI期のものまで混在している。

45号住居址～47号住居址（第95～97図）

出土した資料の1は、口縁部文様帯は渦巻文と梢円区画文を取り組状に配す。胴部文様帯は沈線区画による磨消し懸垂帯と縄文帯を交互に重下させる。2は炉内の埋設土器で地文を条線文で充填し、沈線区画による磨消し懸垂文を垂下させる。3は口縁部下の横位に巡る沈線により口縁部の無文帯と胴部を区画する。これらはV期に該当する。4は埋甕土器で、曾利系の所産と考えられる。9は炉内の埋設土器で、山形突起を付し口縁部文様帯は渦巻文と梢円区画文を配す。胴部文様帯は対応するアーチ状文を施し、V期に該当する。10と37は埋甕炉に使用され、37は沈線区画による磨消し懸垂帯と縄文帯を垂下させる。13は埋甕で沈線区画による対応するアーチ状文と縄文帯を施し、V期に該当する。3軒の切り合いは明確でないが、これらからV期頃が考えられる。

48号住居址（第98図）

本住居址は、埋設土器を伴う石囲い炉を有する。出土した資料の2は埋設土器で、口縁部文様帯は渦巻文と梢円区画文が簡略されて連結している。頸部は無文部を呈するが胴部文様帯は刺突文によって区画され、沈線によるアーチ状文と藤手状懸垂文を垂下させる。1と3の胴部にはやや幅広の磨消し懸垂帯が垂下している。これらからV期の段階が考えられる。

49号住居址（第100～103図）

本住居址は、石囲い炉を有すると考えられる。出土した資料1は床面に密着して逆位で検出された。口縁部文様帯は渦巻文と梢円区画文で配し、胴部文様帯は沈線区画による磨消し懸垂帯と縄文帯を垂下させ、さらに縄文帯を部分的に磨消し帶で上下に区画し、V期に該当する。2は口縁部文様帯が沈線区画による梢円文を連続させ、胴部文様帯も沈線による懸垂文を垂下させる。5は口縁部文様帯に渦巻文と梢円区画文を取り組状に配し、胴部文様帯は対応するアーチ状文と藤手状の懸垂文等を施し、V期に該当しよう。7は埋甕で、4単位の山形突起を付すと考えられる。口縁部文様帯は渦巻文と梢円区画文を連結し、胴部文様帯は隆帯による懸垂文を垂下せる。資料はII～V期段階のものが混在している。

50号住居址（第105図）

本住居址は、地床炉を有する。出土した資料は總てが埋土中のもので、6～9の破片には磨消し懸垂帯と縄文帯が交互に垂下されている。このことからIV期頃の段階が考えられる。

51号住居址（第107図）

本住居址は、入れ子状の埋設土器を伴う石囲い炉を有する。出土した資料は炉内の埋設土器の2点のみである。口縁部文様帯は渦巻文と梢円区画文が交互に配するが2は入り組状とし、胴部には磨消し懸垂帯を垂下させている。このことからV期の段階が考えられる。

52号住居址（第109図）

本住居址は、地床炉を有する。出土した資料の1、2は条線文を地文として充填する。1は沈線により懸垂文を垂下させ、2は頸部に2段に円形刺突文を連続させ、下方に隆帯による懸垂文を垂下させる。その他の破片からIV期前後の頃が考えられよう。

53号住居址（第110図）

本住居址の出土した資料は6点の破片のみであった。6の資料には幅狭の磨消し懸垂帯が見られるところからIV期の段階頃が考えられる。

54号住居址（第112図）

本住居址は、石囲い炉を有するものと考えられる。出土した資料1は、隆帯による懸垂文を胴部に垂下させていることからII期の段階が考えられる。

55号住居址（第114図）

本住居址は、円形気味の石囲い炉を有する。出土した資料は全てが埋土中からの検出であり、胴部片には磨消し懸垂帯を施すものが多く見られることから、IV～V期の段階頃が推察される。

56号住居址（第116、117図）

本住居址は、方形の石囲い炉を有する。出土した資料の19は炉内及び炉脇に集中して検出され、ほぼ完形の個体となった。口縁部文様帶は渦巻文と梢円区画文を入り組状に配し、胴部文様帶は磨消し懸垂帯と縄文帯を交互に配し、磨消し帯には沈線による先端部を藤手状とする沈線文を施している。その他の破片も渦巻文の簡略化と幅広の磨消し懸垂帯が見られる。このことからV期の段階が考えられる。

57号住居址（第119図）

本住居址は、石囲い炉を有する。出土した資料は全てが埋土中からの検出で、IV期～V期の破片が見られる。

58号住居址（第121図）

本住居址は、南北にやや長い梢円形で5本の主柱穴を有すると考えられる。周溝は検出できなかった。炉址は、集石炉である。出土土器はII期の段階に該当すると考えられる。1は、頸部に縄文が施文され、6、7は頸部を無文帯とする。1、4、5の胴部は沈線か隆帯による懸垂文と波状懸垂文を垂下させ、4の底部には木葉痕が残る。3は胴部に幾何学文様を施している。2は完形の小型土器。

59号住居址（第122図）

本住居址は、58号住居址と重複関係にあり柱穴、周溝は検出できなかった。炉址柱穴南方部が開口する石囲い炉で埋設土器を伴っている。3の埋設土器は燃糸文を地文とする連弧文系土器。2は加曾利E式土器とは異質である。覆土中にはV期と考えられる破片（8）も混在しているがII～III期の段階に位置付けられよう。

60号住居址（第124図）

本住居址は、埋設土器を伴う石囲い炉を有すると考えられる。出土した資料にはII～V期の段階の破片が見られる。2は口縁部文様帶の喪失からV期頃に該当しよう。5の埋設土器はII期、その他はIV～V期に該当される。

61号住居址（第126図）

本住居址は、埋設土器を伴う石囲い炉を有すると考えられる。埋設土器は口縁部文様帶を渦巻文と梢円区画文で配し、胴部文様帶は沈線区画によるやや幅広の磨消し懸垂帯と縄文帯を垂下させる。V期の

段階が考えられる。

62号住居址（第128図）

本住居址は、方形の石廻い炉で炉内に埋設土器を伴う。出土した資料3の炉内埋設土器は、4単位の山形突起を付し口縁部文様帶は渦巻文と梢円区画文を連結して配す。胴部文様帶は沈線区画による磨消し懸垂帯と条線文帯を垂下させる。1も口縁部文様帶を簡略した渦巻文と梢円区画文で構成され、梢円区画内に刺突文で充填する。胴部文様帶も沈線区画による磨消し帯と繩文帯を垂下させ、VI期頃が考えられる。6は沈線区画によるアーチ状区画を配し区画内を繩文で充填する。これらからV期頃の段階が考えられる。

63号住居址

本住居址に伴う土器の出土はなかった。

炉址の形態分類

本遺跡の炉址形態を分類すると1、石廻炉 2、石廻埋甕炉 3、集石炉 4、埋甕炉 5、地床炉の5類に分かれる。石廻炉はその形状で方形、長方形、円形、コの字状(一方が開口する)、六角形、梢円形に細分される。各住居址を一表にすると

住居番号	石 廻 炉	石 廻 埋 甕 炉	集 石 炉	埋 甕 炉	地 床 炉	不 明	形 状	土器分類	備 考
9号住居	○						不明	II期	
10号住居	○	○					コの字	II期	南方炉内の一部に敷石
11号住居	○						ノ	II~III期	南方が開口
12号住居	○						ノ	II期	南方が開口
13号住居		○					ノ	III期	南方が開口
14号住居			○					III期	埋設土器の東方に列石
15号住居	○						方形	VII期	
16号住居	○						ノ	VII期以前	
17号住居	○						コの字?	II~III期	西方が開口
18号住居		○					不明	I~II期	南方が開口する可能性有り 埋甕有り
19号住居			○					II~III期	
20号住居			○					II~III期	
21号住居	○						不明	II~III期	西方が開口する可能性有り
22号住居		○					ノ	IV期前後	埋甕有り
23号住居				○				V期	
24号住居				○				V~VI期	
25号住居	○						方形	IV期	
26号住居	○						コの字	II期	南方が開口
27号住居		○					方形	IV~V期	
28号住居		○					不明		
29号住居	○						方形	V~VI期	
30号住居1 ノ 2		○					梢円形	III~IV期	
31号住居		○					不明	III~IV期	南方に埋甕
32号住居		○					不明	VI期	
							不明	III期	

第IV章 調査の結果と今後の課題

住居番号	石 炉	石 圓 埋 甕 炉	集 石 炉	埋 甕 炉	地 床 炉	不 明	形 状	土器分類	備 考
33号住居					○				
34号住居		○							
35号住居	○								
36号住居		○							
37号住居					○				
38号住居		○					長方形	V期頃	埋甕有り
39号住居						○		V期	埋甕有り
40号住居					○			IV~V期	
41号住居1 〃 2	○				○		六角形	IV期頃	南方に埋甕有り
42号住居	○						方 形	III~IV期	西方に埋甕有り
43号住居					○			V期頃	
44号住居	○						円 形		埋甕有り
45号住居	○						長方形	V期頃	
46号住居1 〃 2		○					方 形	V期頃	
47号住居		○			○		方 形	V期頃	入れ子状
48号住居		○					方 形	V期	
49号住居	○						不 明		南方に埋甕有り
50号住居								IV期	
51号住居		○					方 形	V期	埋設土器は入れ子状
52号住居						○		IV期前後	
53号住居	○?						不 明	IV期	
54号住居	○						方 形 ?	II期	
55号住居	○						六角形	IV~V期	
56号住居	○						方 形	V期	
57号住居	○						方 形	IV~V期	
58号住居					○			II期	
59号住居		○					コの字	II~III期	石圓の南方が開口
60号住居		○					不 明	II期以降	
61号住居		○					六角形	V期	綠石はすべて抜かれている
62号住居		○					方 形	V期	
63号住居						○		不明	

炉址の形態と土器分類表

	I ~ II期	III期	IV期	V期	VI期	
石 圓 炉	12,26,54 -18 -9,10 -59,60-	-11,17,21-	-42-	25,53 -55,57 41,36 - 27-	45,56 38,46,48,51,61,62-27-	-29---16 15
石圓埋甕炉		13,32,34 -19,20-	-30-22			
集 石 炉	58					
埋 甕 炉			14		47	
地 床 炉				50,52 -40-	43 -24-	
不 明					23,31,39	

炉址形態の変化

本遺跡に於いて検出された加曾利E式期の住居址総数は55軒を数える。

炉址の形態分類では、石囲炉を有するものが19軒で全体の35%を占めている。II期に位置付けられる12号住居址からVI期に位置付けられる敷石住居址の15号住居址まで使用されている。

その形状は方形を呈するものが大半で、15、16、25、29、35、42、54、56、57号住居址の9軒で約半数を占める。そのピークはII～III期とIV期に見られる。

長方形は45号住居址の1軒、円形は44号住居址の1軒のみである。コの字状に一辺が開口するものは、11、12、17、26号住居址の4軒を数え、開口方向は17号住居を除き南方である。II～III期の段階に見られる。六角形は55号住居址にのみ見られる。不明は3軒である。

石囲埋壟炉を有するものは、20軒で全体の36%を占めている。I～II期に位置付けられる18号住居址からV期の間に使用されて、V期に集中している。

その形状による分類では、方形が27、36、46、48、51、62号住居址の6軒を数え、V期前後に集中する。

コの字状が10、13、34、59号住居址の4軒で10、13、59号住居址が南方、34号住居址が東方に開口する。II～III期の段階に見られる。

六角形は41、61号住居址の2軒、長方形が38号住居址の1軒、楕円形が30号住居址の1軒で不明が7軒である。

集石炉は19、20、58号住居址の3軒が検出され、全体の5%を占める。その分布は調査区の西方に位置する。II～III期に見られる。

埋壟炉は14、24、41、47号住居址の4軒が検出され、全体の7%を占める。III～VI期前に見られる。

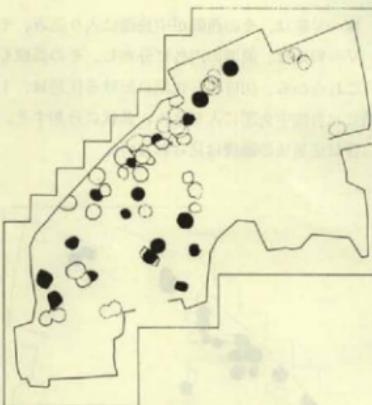
地床炉は33、37、40、43、50、52号住居址の6軒が検出され、全体の11%を占める。調査区の中央部に集中している。IV～V期に見られる。

住居址の推移

本調査区の南方部は宅地等が既存している為に、調査地区的対象外であるがその大半は削平が著しく旧状は保っていない。また、北東部の高所は開墾が遺構面まで達しており住居址も破壊されている可能性も考えられる。検出された55軒について土器分類による分布図(第325図)によりその推移を見てみたい。

I、II～III期に於ける分布は、60号住居址を除き調査区の中央より西に分布し、北西～南西の台地縁部に多く見られ、全体にやや偏平な楕円形で環状を呈している。

III～IV期は、前期より内部に入り込みその軒数も減少する。

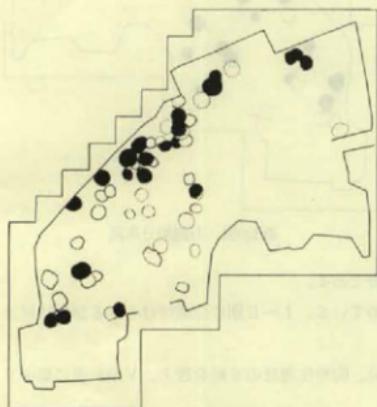


第320図 石囲炉分布図

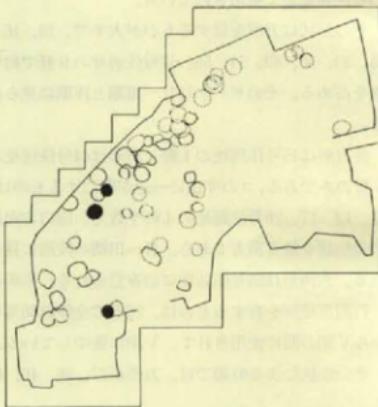
IV～V期は、その西限が中央部に入り込み、その多くが弧線上に分布する。

V～VI期は、前期の内外に分布し、その弧線も北東方向に伸びる。

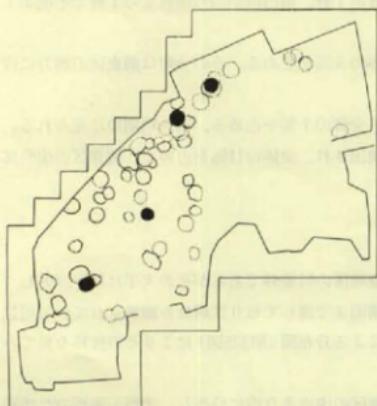
これらから、加曾利E式期に於ける住居は、I期末～II期にかけて台地の南西部に選地し、III期～IV期には台地中央部に入り込み、弧状に分布する。IV～V期には前期より弧状を拡大するが、V期の段階以後は住居址の継続は見られない。



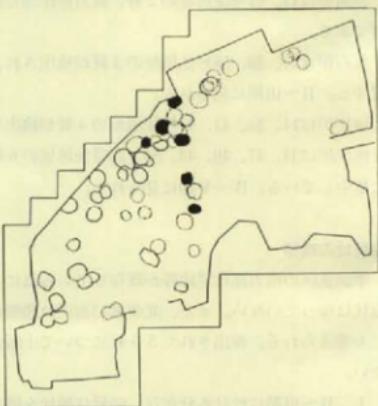
第321図 石囲埋焼炉分布図



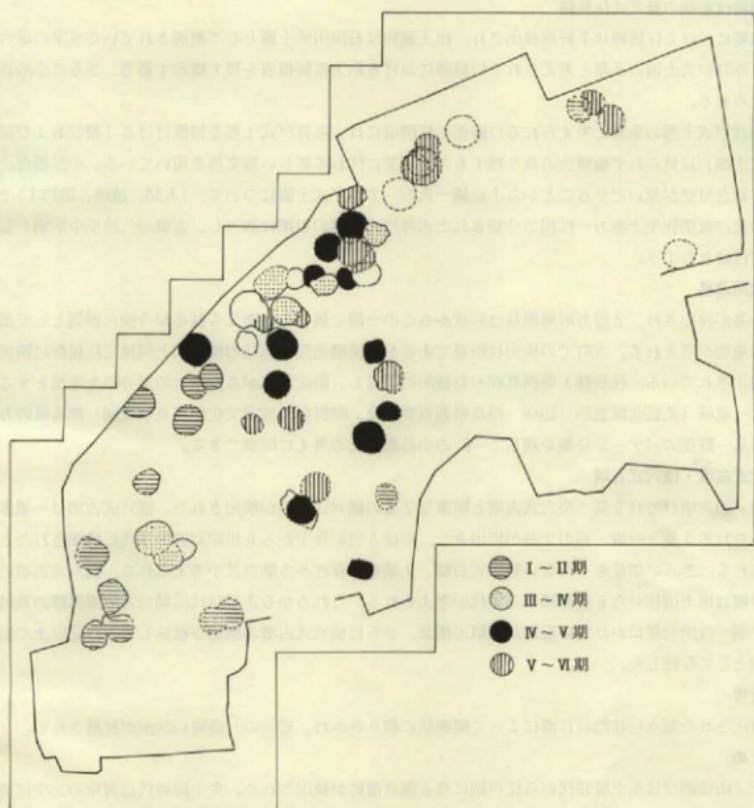
第322図 集石炉分布図



第323図 埋焼炉分布図



第324図 地床炉分布図



第325図 加曾利E式期の住居址の推移

古墳時代前期の竪穴式住居跡

当期に於ける住居跡は7軒が検出され、出土遺物は石田川式土器として把握されているS字口縁台付甕と赤井戸式土器の系譜と考えられる口縁部における粘土帶輪積痕を残す斐形土器等、さらに小形器台が見られる。

赤井戸式土器の系譜と考えられる口縁部の輪積痕には、赤井戸式土器を特徴付ける「帯状および段状縄文土器」は見られず輪積痕のみを残すものと縄文に代わる新しい施文具を用いている。小形器台、S字口縁台付甕が見いだされることから小島純一氏の一赤井戸式土器について(人間、遺跡、遺物Ⅰ)で赤城山麓の後期弥生土器の一様相で分類された赤井戸式土器のⅢ期に該当し、古墳時代前期中葉頃として位置付けられよう。

方形周溝墓

3基が検出され、2号方形周溝墓は形状からこの一群に属すると考えられるが今後の課題として調査例の増加が望まれる。当町での検出は所見であるが、前橋市荒砥地域の検出例と同様に住居群に隣接して検出されている。住居群と周溝墓群が有機的に隣接し、眼前に広がる沖積地の部分を生産域とする一集落一墓域(荒砥北原遺跡 1986 群馬県教育委員会、健群馬県埋蔵文化財調査事業団 群馬県の方形周溝墓一群在のパターン分類を通して)の小島敦子氏の考えに同調できる。

竪穴式古墳・横穴式古墳

上ノ山古墳群では5基の竪穴式古墳と明確な2基の横穴式古墳が検出された。竪穴式古墳は一墳多葬が見られる3基と一墳一葬の2基が検出され、ほぼ5世紀後半から6世紀初頭の年代に構築されたと考えられる。さらに埴丘をもたない竪穴式石櫛、土壙墓の存在から階級差が考えられる。横穴式古墳の漏4号墳は出土遺物から6世紀後半の年代が考えられる。これらから古墳時代前期の方形周溝群の墓域から中期～後期前葉にかけての竪穴式古墳の構築、さらに横穴式古墳の構築が継続して2世紀以上の間が墓域として存続した。

中近世

検出された掘立柱建物址は溝によって環溝状に取り巻かれ、近世の一農家の状況が推測される。

まとめ

上ノ山遺跡では先土器時代から江戸期に亘る複合遺跡が検出された。先土器時代は対岸の三ツ屋遺跡等の関連が課題であり、縄文時代中期の加曾利E式期の土器編年、集落論等残された課題が山積し、三原田式土器ではその分布が赤城山麓そして笠懸野(清泉寺遺跡)と広がりが確認されている。18号住居ではE2式と供伴している。また、曾利式土器、大木式土器との供伴関係も広域的にその関係を追及しなければならない。そのためには赤城山麓さらに群馬県の編年が早急に望まる。

上ノ山古墳群では竪穴式古墳における一墳多葬と一墳一葬、さらに埴丘をもたない竪穴式石櫛における階級差と地域周辺との支配階級(首長)との関係は今後の検討課題としたい。